



2019 年度 年次報告書

熊本大学教授システム学研究センター

〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40番1号

電話：096-342-2895

ウェブサイト：<http://www.rcis.kumamoto-u.ac.jp/>

内容

センター長挨拶	4
教授システム学研究センターの構成	6
インストラクショナルデザイン研究部門 今年度の取り組み	8
学習支援情報システム研究部門 今年度の取り組み	10
地域連携システム研究部門 今年度の取り組み	11
e ラーニング推進室 今年度の取り組み	13
FD 活動支援室 今年度の取り組み	14
今年度のセンターとしての取り組み	15
教育関係共同利用拠点	16
共同利用拠点の 5 つの取り組み	17
取組 1 : 公開講座	
本年度の取り組みの概要	19
各地会場の参加者数	20
プログラム（入門編）の内容	21
プログラム（応用編）の内容	22
参加者の声	23
取組 2 : ID ポータル	
本年度の取り組みの概要	25
コンテンツ一覧	26
サイトおよび各コンテンツへのアクセス数	27
取組 3 : 公開科目	
本年度の取り組みの概要	29
公開科目一覧	30
各科目へのアクセス状況	31
取組 4 : 講師派遣	
本年度の取り組みの概要	33

派遣事例 1	38
派遣事例 2	40
取組 5 : オンラインプログラム	
本年度の取り組みの概要	42
プログラムの学習内容（有料版と無料版）	43
アクセス数	44
有料版プログラム（第 1 期）の実施	45
「自律学修支援編」の公開開始	46
持続的な産学共同人材育成システム構築事業	47
事業の概要と今年度の取り組み	48
連携研究組織	51
連携研究員	52
研究成果のリスト	56
セミナーの開催	60
デザイン研究ワークショップ	61
学会への参加	62
国内学会：参加報告 1	63
国内学会：参加報告 2	64
国内学会：参加報告 3	65
国際学会：参加報告 1	66
国際学会：参加報告 2	68

センター長挨拶

教授システム学研究センター（以下、本センター）は、2017 年度に我が国で初めての教授システム学の研究拠点として設置され、「インストラクショナルデザイン研究部門」、「学習支援情報システム部門」、「地域連携システム研究部門」、「e ラーニング推進室」の 3 つの研究部門と 1 つの事業部門でスタートいたしました。本年度は、事業部門の「FD 活動支援室」が新たに加わりました。当室は、後述の大学教育関係共同利用拠点の認定機関としての取組みを中心に、大学教育統括管理運営機構が主管する、本学の FD 活動を支援する役割を担っていきます。これにより、本センターの研究成果を学内外へ発信し、大学等での教育実践を具体的に支援する仕組みが構築できたものと考えています。

本センターは、2018 年 9 月に文部科学省の教育関係共同利用拠点として認定を受けました。『教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点』における事業は、(1)ID 公開講座、(2)ID ポータル等による情報提供、(3)公開科目による学修機会の提供、(4)FD 研修講師・大学教育設計コンサルタントの派遣、(5)授業改善のためのオンラインプログラムの 5 つの取組みを柱としています。2 年目となる本年度は、昨年度の無料版公開に続き、「教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）」の有料版を公開しました。有料版は、無料版の内容に加え、学習者同士のディスカッション、教員による課題添削の機会があり、対面学習の場も設けています。有料版 第 1 期（2019 年 11 月～2020 年 3 月）では、10 名の方が修了されました。

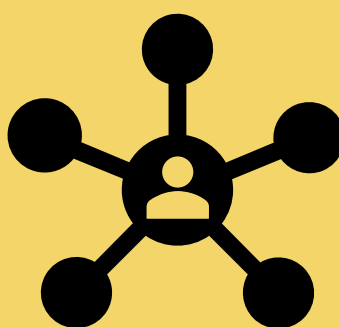
また本年度は、文部科学省の「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」（令和元年度-5 年度）において、東北大学を代表校とし、熊本大学、大阪府立大学、立教大学の計 4 大学が連携して実施する取組み『創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム』が採択されました。次年度以降、順次開講される予定の「産学連携教育イノベーター育成プログラム」のうち、本年度は、東北大学と協力して「大学教育基礎力育成コース」の設計および開発を行いました。

その他、連携研究組織との連携研究等も含む、各研究部門の特徴を活かした教授システム学に関する多様な研究が行われ、当該成果は国内外の学会等で発表しています。また、海外の大学等との交流も盛んに行っています。本年度は、トゥエンテ大学（オランダ）の Susan McKenney 先生をお招きして 2 日間のデザイン研究ワークショップを開催し、10 名の参加がありました。

最後になりましたが、本報告書記載の諸活動やウェブサイト（<https://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/>）をご覧いただくことで、本センターの活動にご理解をいただき、今後とも皆様からのご指導、ご支援をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

教授システム学研究センター長
鈴木克明

教授システム学研究センター 研究部門と事業部門



教授システム学研究センター

(Research Center for Instructional Systems; RCiS) は
教授システム学の世界的研究拠点を目指す
3つの研究部門と2つの事業部門から構成されています。

教授システム学研究センターの構成

教授システム学研究センター（Research Center for Instructional Systems; RCiS）は教授システム学の世界的研究拠点を目指す以下の3つの研究部門と2つの事業部門から構成されています。

<研究部門>

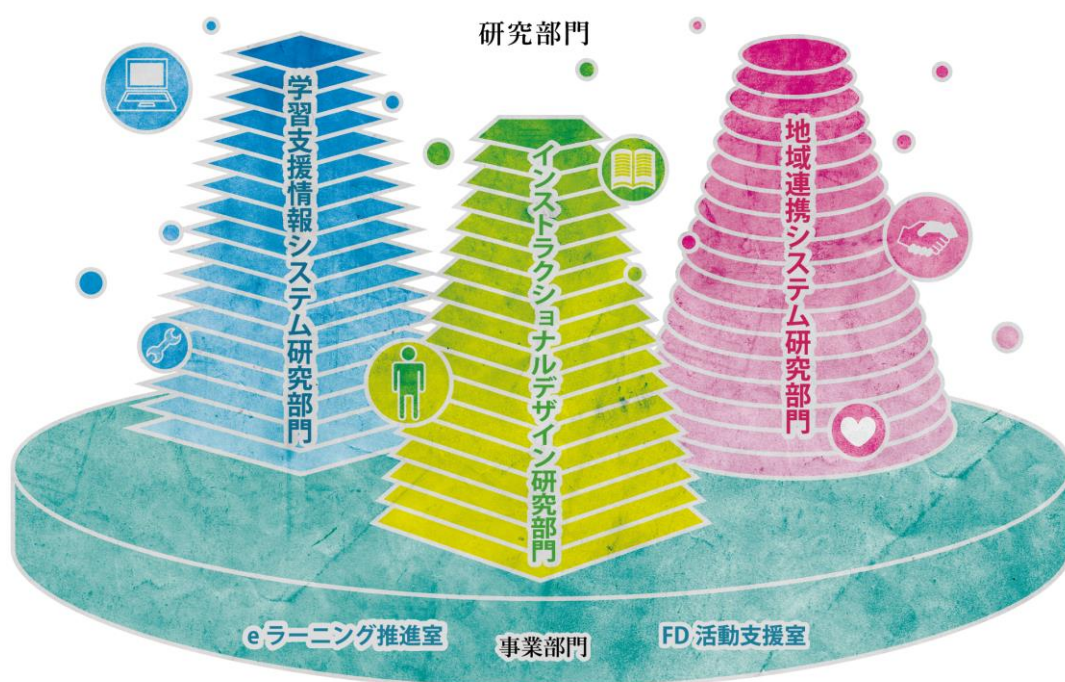
- インストラクショナルデザイン研究部門
- 学習支援情報システム研究部門
- 地域連携システム研究部門

<事業部門>

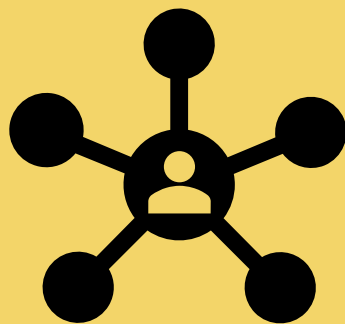
- eラーニング推進室
- FD 活動支援室

本センターは実践的フィールドを学内外に有し、高等教育や職業人教育を対象とした研究を展開していることが特徴です。

日本初の教授システム学研究拠点として「教授システム学、インストラクショナルデザインなら熊本大学」というイメージを発展的に具現化し、国内外の研究拠点との連携を進め、企業・高等教育機関などの連携研究組織および本学教授システム学専攻修士などからなる連携研究員との共同研究を通じて、教授システム学を発展させ、社会に貢献します。



今年度の取り組み (部門別)



インストラクショナルデザイン研究部門

今年度の取り組み

ID 研究部門では、「人の学びを支援する」研究として以下を推進しています。

- (1)教育工学分野における教育改善・支援の研究者の育成
- (2)ID をユーザーとして活用し、自他の業務を改善できる人材の育成
- (3)高度職業人ならびに地域の人材育成への ID の適用ならびにその支援
- (4)人材育成における対象者の特性に即した教授法の確立とその教授法の普及、
- (5)認知科学・学習科学の知見を取り入れた ICT による教育支援の実践
- (6)自立した学習者の育成のための教育プログラム設計と実践を行うこと

今年度の主な取り組みは、以下の通りです。

(1)に関して、科研(16H03081)での研究成果をベースに日本教育工学会とも連携し大学版 ID 専門家養成上級ワークショップの体系化を行いました。また、本センターの連携研究員と教育工学分野の共同研究することにより、より高度な研究者の育成に貢献しました。

(2)と(3)に関しては、センターの「FD 講師や大学教育設計コンサルタントの派遣」事業とも関連し、今年度は 38 件の派遣を行い、1900 名以上の受講者に対し研修を行いました。新事業部門「FD 活動支援室」を立ち上げ、「教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点」事業において、FD・プレ FD 用オンライン教材「教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）（略して KSP）」の開発を行いました。

また、(3)に関しては、文部科学省の「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」のカリキュラムデザインを行い、教材開発にも携わりました。

(4)では、内閣府による SIP「第 2 期自動運転の高度化に即した HMI 及び安全教育方法に関する調査」受託研究において、対象者の特性を考慮した安全教育方法の研究および設計を行っています。また、アルー(株)との連携研究において、新入社員の成長を 5 段階モデルとして提案しました。

(5)については、一般社団法人日本私立大学連盟主催の SD 研修「創発思考プログラム」の改善や、The 2nd JACET Summer(46th) and English Education(7th) Joint Seminar での ICT を活用した教材開発に関するセミナーなどを実施した。また、CIEC（コンピュータ利用教育学会）九州支部と大学生協の合同研究プロジェクトにおける電子教科書（教材）や、ICT を活用して教育を支援するシステムやツール(科研 19H01716, 18K18657)などの設計、開発も行いました。

(6)に関連して、先の KSP 教材で、自立した学習者育成のための学習項目を扱っているだけでなく、受講者自身が、本教材により、自立した学習を体験できるように設計しました。また、本教材のオンラインテスト作成を通し、知的技能のテスト作成の手法を整理しました。

以上の活動に加え、これまでの取り組みや研究を書籍や論文などとして公表しました。また、研究成果の普及活動として、関連学会での活動、ID ポータルの運用や、商業雑誌への記事掲載など、積極的に行っています。

インストラクショナルデザイン研究部門の研究紹介

▶ファイルを開く

* 上記ボタンをクリックすると、発表資料へアクセスできます

学習支援情報システム研究部門

今年度の取り組み

学習支援情報システム研究部門は、本学及び高等教育機関一般、地域での人材育成に役立つオンラインツールやアプリケーションの開発を行い、それを用いた ICT 利用教育を実践を行っています。また、インストラクショナルデザイナーと並ぶ専門職として AI 技術やデータサイエンスの教育利用を促進する「ラーニングテクノロジスト」がその重要性を増していることを踏まえた研究も行っています。

本部門では 2019 年度、以下のような研究プロジェクトに貢献しました。

- ・学科レベル適用型学習目標構造化システムと学科ポリシー充足度測定ツールの開発
 - ・学問に根ざした大学教育の学修成果向上のための教授法・人材・組織の一体的な開発研究
 - ・災害初動における臨床看護師のコンピテンシー開発及びオンライン学修支援環境の構築
 - ・生涯学習における自立的 e ポートフォリオ構成・活用能力修得のための学習支援環境構築
 - ・実践体験型学習での学生主導の学びを実質化するための授業改善方策システムの開発
 - ・人工知能を用いた授業評価アンケートに基づく授業改善方策提案システムの設計・開発
-
- ・教育で防ぎ得た重大事故を防ぐ能動的 L M S を軸とする安全教育システムの実現（代表：喜多）
 - ・高等教育における大規模履歴データを活用した適応的学習システムの研究
 - ・ラベルへの化学物質の危険有害性情報の付加に関する調査と開発及びその効果の測定

詳しくは、

<https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000040336227/>

<https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000020284739/>

をご覧ください。

地域連携システム研究部門

今年度の取り組み

地域連携システム研究部門では、はたらく世代(主に若年・中年層の社会人)、医療職・教員などの専門職のように、従来の生涯学習とは異なった層が興味をもち、かつ参加が可能なプログラム、および地域や企業における人材養成のニーズに対応した教育プログラムの開発・展開に関する研究を行っています。

2019 年度は、熊本企業の人材育成連携に関する協定を締結している熊本経済同友会との共催で、社員の健康管理法に関する研修会・ボディデザインスクールを 2 回にわたって実施しました。その理由は、人材を育成し、その能力を発揮するにあたり、基本となる健康は非常に重要であるからです。産業保健の分野では、メンタルヘルスや生活習慣病などの疾病によって休職するアブセンティズムに加え、近年は出勤しているものの、前述のような疾病を持つためその能力を十分に発揮できないプレゼンティズムが非常に問題になっています。経済産業省も、社員の心身の健康が、最終的に企業の業績向上につながるという「健康経営」という概念を強力に後押ししており、「社員の健康増進は福利厚生ではなく投資である」というコンセプトのもと、今回の研修会開催に至りました。

社会人になって健康管理法を学ぶことも重要ですが、企業として取り組んでいるケースはまだまだ少ない状況です。「大学が健康教育の最後の砦」との考えのもと、学生時代から健康的な食事の摂り方、短時間でも実践できる運動法を習得させることも重要だと考えます。しかしながら、中高の保健の授業は「雨降り保健」と揶揄されるように、雨が降って体育実技ができない場合に保健の授業を実施することが多く、学生のヘルスリテラシーは必ずしも高くありません。そこで 2019 年後期の共通教育科目「健康の科学 D（ボディデザイン学）」を開発し、主として学部 1、2 年生に対して、適切な食事や運動、生活習慣病やメンタルヘルスとの関連、継続するための方策などについて、グループワーク、運動実技を中心に実施しました。今後はこれらの授業をオンラインでも受講できるように科目開発したいと考えています。

同様に放送大学では、自分の身体（体重）を負荷にした筋力トレーニングの方法と、その効果について紹介した 15 分の番組を 15 回分作成し、BS において定期的に配信しています。想定していた対象層は中高年者であったが、新型コロナウイルスで外出自粛を余儀なくされている小中学生も実施できるように改変して、新たに放送する予定です。

また社会人の多くは、論理的思考やロジカルシンキングなど学ぶ機会はあるものの、実践で有効活用できないという事例も多々見られます。そこで看護管理者向けの雑誌に、ロジカルシンキングの基本的な考え方・アプローチを紐解き、陥りやすい間違いやコツを解説した記事を執筆いたしました。今後はこの記事を基に書籍化する予定です。

最後に熊本で唯一のインターナショナルスクール（小学校）である熊本インターナショナルスクールは、2019 年国際バカロレア（IB）の PYP 候補校となり、現在教員の研修などに力をいれています。今後、本研究部門も効果的・効率的・魅力的な研修の開発に協力し、熊本の国際化および国際的な視野をもった人材の育成に貢献したいと考えています。

地域連携システム研究部門 都竹教授の研究紹介

▶ファイルを開く

地域連携システム研究部門 江川准教授の研究紹介

▶ファイルを開く

* 上記ボタンをクリックすると、発表資料へアクセスできます。

e ラーニング推進室 今年度の取り組み

e ラーニング推進室は、学習支援情報システム研究部門の研究成果を教育実践に応用し、本学の教育における ICT 活用を実質的に進め、教育の質向上につながることを目指しています。具体的には、e ラーニング化の企画・推進、コンテンツの開発支援、e ラーニング授業の設計支援、アプリケーション開発の企画実践、システムの管理運営その他 ICT 利用教育・メディア教育の実践支援等に関する業務を行っています。

2019 年度は、本学の 50 科目のコンテンツ開発を行い、e ラーニング化の啓蒙・普及活動として、新任・転任者研修会を 4 月と 11 月に実施し、それぞれ 10 名以上の参加がありました。また LMS 講習会については、3 回実施いたしました。

* 毎年開催している e ラーニング連続セミナーは、2020 年 3 月 11 日に開催予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で中止となりました。



図：e ラーニング推進室ウェブサイトのトップ画面

e ラーニング推進室の詳細な年次報告

▶ ファイルを開く

* 上記ボタンをクリックすると、資料へアクセスできます。

FD 活動支援室 今年度の取り組み

本センターでは今年度から運営組織として、新たに「FD 活動支援室」（下図参照）を設置しました。

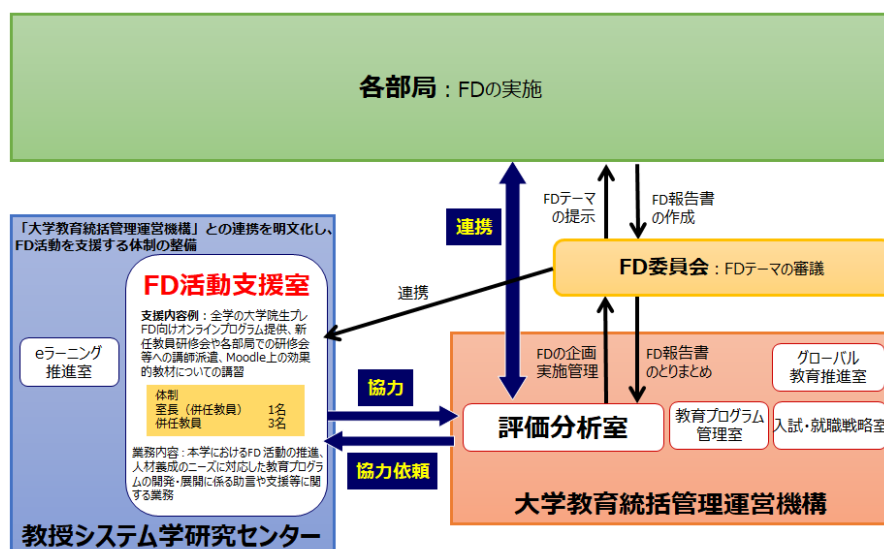
本センターがこれまで新任・転任教員等教育研修会講師や e ラーニング推進活動などにより行ってきた貢献に加え、本センター内の運営組織として新たに「FD 活動支援室」を設置することで、大学教育統括管理運営機構が主管する本学の FD 活動を支援する体制を整え、教育関係共同利用拠点の以下の 5 つの取組を中心として、本学の FD 活動の方針に沿った支援を行います。

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「ID ポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD 研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 教育改善スキル修得オンラインプログラム

今年度は、2020 年度以降に以下を実現するための準備を進めました。

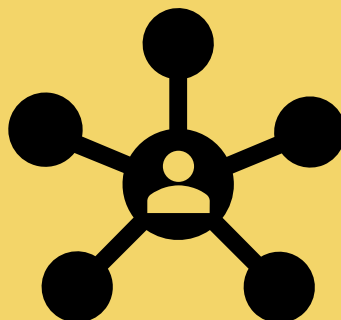
1. 大学院生への（努力義務化）プレ FD として「教育改善スキル修得オンラインプログラム」を全学に提供する（学内者は受講料無料）。
2. 新任・転任教員等教育研修会への講師派遣を継続し、各部局での研修会・検討会への講師派遣を行う。
3. 学生の学修支援につながる Moodle 上での効果的な教材作成方法の実例を取り上げた講演会を、初級編から上級編まで各種実施するとともに、オンラインでも同内容をいつでも受講できるようにする。

教授システム学研究センターFD活動支援室の設置について



図：教授システム学研究センターFD 活動支援室と熊本大学内他部局の関係

今年度の取り組み (センター全体)



今年度はセンターとして、以下2つの取り組みを主に進めました。

- (1) 教育関係共同利用拠点
- (2) 持続的な産学共同人材育成システム構築事業

(1) 教育関係共同利用拠点



**本共同利用拠点では 5 つの取り組みとして、
（１）公開講座、（２）ID ポータルの運用、（３）公開科目、
（４）講師派遣、（５）オンラインプログラムの提供を行っています。**

教育関係共同利用拠点の5つの取り組み

本センターは、教育関係共同利用拠点として認定されています。

拠点名称：教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点

共同利用分野：大学の職員（教員を含む）の組織的な研修等の実施機関

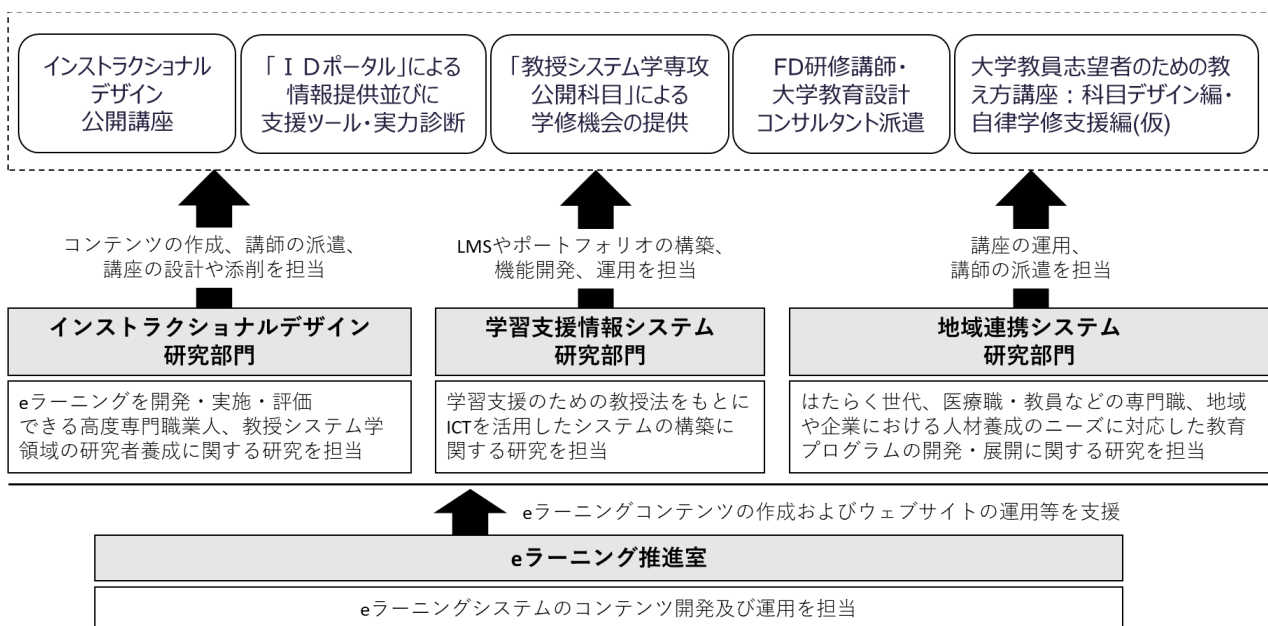
期間：平成 30 年度から 32 年度

教育関係共同利用拠点として、教授する力のうちの授業実践力（デリバリ）に対するノウハウを身に付けることに留まらず、デリバリの基盤となる授業設計力（デザイン）あるいはカリキュラム設計力を身に付けるための授業設計、教育評価、授業改善のための分析手法、改善手法等を体系化したオンライン教材、ワークショップ等の開発・提供といった活動を行っています。

<5つの取り組み>

1. インストラクショナル・デザイン公開講座
2. 「ID ポータル」による情報提供並びに支援ツール・実力診断
3. 「教授システム学専攻公開科目」による学修機会の提供
4. FD 研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣
5. 大学教員志望者のための教え方講座：科目デザイン編・自律学修支援編(仮)

上記 5 つの取り組みは、本センター内の各部門が協力し、運営しています。



教育関係共同利用拠点

取組 1

公開講座



本センターでは、インストラクショナル・デザインに関する
公開講座を各地で開催しています。

本年度の取り組みの概要

教育関係者、企業における研修・教育担当者、医療関係者、日本語教師等、教育・研修を担当する幅広い層を対象に、インストラクショナル・デザイン（以下、「ID」）を紹介・学ぶ機会を提供する公開講座を2011年より実施しています。講座は、IDの基礎用語10個を学び、ARCSモデルの活用事例をワークで学ぶ入門編、および入門編で学んだID基礎用語をベースに、参加者同士のワークを中心に参加者自身の事例を改善し、IDを使う練習を徹底的に行う応用編から構成されています。いずれの講座でも、事前事後学習ではMoodleを使用しております。本年度は、入門編は東京、大阪、福岡、熊本、名古屋（本年度は台風の影響で中止）で、応用編は東京、大阪、福岡で実施いたしました。

◆入門編◆

講師：都竹茂樹、平岡斉士、天野慧

学習目標：

- (1) IDの基礎用語10個がどのような場面でどのように活用できるかを例示できる（知的技能）
- (2) ARCSモデルの視点から、教育事例の課題点を指摘し、適切な改善方法を選ぶことができる（知的技能）

概要：

eラーニングでの自己学習や受講者同士のワークを通じてID10の基礎用語を学んでいきます。また、対面ワークショップでは、10個の基礎用語の中からARCSモデルに絞り、講師が提示する教育事例に対する改善策の検討を受講者同士のワークで行っていきます。IDの道具をどのような場面でどのように活用できるか提示できるようになることを入門編の目標としています。

◆応用編◆

講師：鈴木克明、都竹茂樹

学習目標：

- ・IDの基礎用語10個のうち1つ以上を応用して、自分の教育事例の改善案を提示できる（知的技能）

概要：

入門編で学んだID基礎用語をベースに、応用編では参加者同士のワークを中心に構成し、IDを使う練習を徹底的に行います。みなさんが取り組まれている教育事例について、IDを用いて改善案を提示できることを応用編の目標としています。

* 昨年度までに入門編の事後テストに合格し修了認定された方や、他の場でIDを学習し入門編の学習目標を達成している方等は、応用編から受講可能です。ただし、その際には、別途ご案内する応用編の前提課題へ取り組み、合格基準を満たす必要があります。

各地会場の参加者数

【入門編】 全受講人数：152 名

各会場共通：募集人数：40 名 開講時間：10:00～16:00 時間数：5.5 時間

No	講座名	開講日	会場名	申込 人数	受講 人数
1	入門編（大阪会場）	9/21	JEC 日本研修センター江坂 中会議室 B	44	38
2	入門編（熊本会場）	10/5	熊本大学 くすの木会館	29	28
3	入門編（名古屋会場）	10/12	ウインクあいち 1204 号	38	-
4	入門編（東京会場）	10/20	東京工業大学 キャンパスイノベーションセンター 508 号	54	48
5	入門編（福岡会場）	10/26	天神チクモクビル 大ホール	44	38

※ No.3（名古屋会場）は、台風のため中止。

【応用編】 全受講人数：88 名

各会場共通：募集人数：40 名 開講時間：10:00～16:00 時間数：5.5 時間

No	講座名	開講日	会場名	申込 人数	受講 人数
1	応用編（大阪会場）	1/11	JEC 日本研修センター江坂 中会議室 B	34	31
2	応用編（福岡会場）	1/12	天神チクモクビル 大ホール	40	28
3	応用編（東京会場）	1/26	東京工業大学 キャンパスイノベーションセンター 508 号	43	29

プログラム（入門編）の内容

事前学習(e ラーニング)	・ID 基礎力を問う腕試しクイズ ・ID 関連用語についての小レポート提出と相互レビュー ・事前学習のリフレクションと講師への質問の提出
↓	
当日のプログラム	・オープニング ・質問への回答コーナー その 1 (休憩) ・質問への回答コーナー その 2 ・受講者の交流タイム (ランチ休憩) ・ARCS 事例紹介 1 (休憩) ・ARCS の事例紹介 2 (休憩) ・事後課題について ・振り返り ・全体質疑 & 発展学習のご案内 ・受講証書授与 ・事後アンケート ・応用編参加者の方へ
↓	
事後学習(e ラーニング)	・ID 基礎力を問う実力チェッククイズ ・ID の応用に関する小レポート提出と相互レビュー ・発展学習のためのリンク集
↓	
(合格者のみ) デジタルバッジをゲット	



デジタルバッジ
2017 年度 入門編版

プログラム（応用編）の内容

事前学習(e ラーニング)	・教育の分析・改善ワークシートの提出と相互レビュー ・ID 関連用語についての小レポート提出と相互レビュー
↓	
当日のプログラム	・オープニング ・グループで事前課題を共有する ・ペアリング 1 ・ペアで改善案を議論する （休憩） ・グループメンバーにペアワークの結果を伝える 1 ・鈴木先生への質問を考える 1 ・鈴木先生に質問しよう 1 （ランチ休憩） ・ペアリング 2 ・ペアで改善案を議論する 2 ・席移動 ・グループにペアワークの結果を伝える 2 （休憩） ・鈴木先生への質問を考える 2 ・鈴木先生に質問しよう 2 ・全体質疑、総括 ・クロージング、受講証書授与
↓	
事後学習(e ラーニング)	・講座の振り返りと今後のアクションプランを盛り込んだ最終レポート提出と相互レビュー
↓	
（合格者のみ）デジタルバッジをゲット	



デジタルバッジ

2017 年度 応用編版

参加者の声

応用編へ参加された方からいただいたコメントの一部をご紹介します。

<プログラム設計・運営方法に関すること>

- ・ 事前事後の掲示板で、自らのケースにコメントをもらったり、他の方のケースを参考にできたりしたと。
- ・ 質問したいことのグループワークとグループサイズと「個→グループ→個」の流れの説明。
- ・ 質疑の時間が長めに設定され、他の受講生の方の質疑応答を多く聞く事ができたので、非常に有意義でした。モヤモヤがなく終わったのが有難いです。
- ・ 自分の設計を参考にしながらだったので具体的なイメージが付きやすかった。
- ・ やられ感のないこのような講座はこれまでほぼ経験なく、面白さを実感すると同時に、しめきりにも余裕で間に合い提出できた自分の行動変容におどろいています。
- ・ 事前学習をして、ペアワーク、グループワークを行ったので課題が明確になった。
- ・ グループワーク、今回の研修運営そのものが ID に裏付けられている。自分の今後の研修実施でも参考となるところがよかった。

<課題の添削・フィードバックに関すること>

- ・ 課題の添削をしてもらえたこと。
- ・ 事前課題に対して、鈴木先生からのフィードバックを頂けたこと。
- ・ ワークシートの添削をしていただけたこと。レが付いている項目は自信が付きまし、改善するべき点もわかり、それも自信を持って取り組んでいけます。
- ・ 評価と feedback の重要性について教えていただいた。引きつづき関心を持っていければと思う。

<ペアワーク・グループワークに関すること>

- ・ ペアワーク、グループワーク、自分の考えをアウトプットする時間が多い点が良かった。
- ・ ペアワークとグループワークで課題を掘り下げる機会となった。
- ・ ペアワークで得たことがとても真剣に課題に取り組むことが出来た。しかも 2 回！違った意見を聞くことが出来た。
- ・ ペアワークの時間が長くて、沢山議論できた点。グループワークだと一人当たりの時間が短く、いつも消化不良感があったので。
- ・ グループワークの時間が十分に取れ、沢山の話し合いが出来た。

<鈴木先生への質問に関すること>

- ・ 鈴木先生との Q & A 時間が充実していた。
- ・ 先生への質問により、ID の学びが深まった。
- ・ 疑問に対し、その場で回答頂けたこと、対面でしかできない（質疑応答）に時間を費やして頂けたこと。

教育関係共同利用拠点

取組 2

ID ポータル



熊本大学ではインストラクショナル・デザインに関するイベントや文献等の
情報を収集するためのサイト「ID ポータル」を運営しています。

本年度の取り組みの概要

本センターでは、ID に関する情報収集のためのウェブサイト「ID ポータル」を運用しています。ID ポータルでは、ID と関連する学会やワークショップ等のイベント、ID に基づいた教育実践をまとめた論文情報、教育実践のお悩みを ID に基づいて解決する QandA 等を提供しています。

本年度は、まずサイトへのアクセス情報分析をするためのプラットフォームを構築しました。これにより、利用ニーズの高いコンテンツの傾向を割り出し、今後のコンテンツ作成計画を立案できる環境の整備が進みました。

次に、ID 文献の掲載方針見直しやリンク切れ等の対応、正確な情報を迅速に提供するための業務フローの見直しを行いました。また、ID ポータルのプラットフォーム老朽化に伴う不具合の生じる頻度が上がってきたことから、入れ替えやアップデートの検討を行いました。

さらに、「ID について学びたい・知りたいという人にとって入口（ドア）となるウェブサイトでありたい」という本サイトの目的をより明確にするため、サイトのロゴを新しくデザインしました。新たなプラットフォームでより多くの方に本サイトを利用していただけるよう、次年度以降も拡張を進めたいと思います。



図：ID ポータルウェブサイト：トップ画面

ID ポータル

ID(Instructional Design : インストラクショナル・デザイン)を学ぶ人への応援サイト

熊本大学大学院 社会文化科学研究科 教授システム学専攻

ホーム イベント ID関連文献等 IDマガジン お悩み解決Q&A 実力チェック 作業支援ツール 本サイトについて

IDポータルへようこそ！

このサイトは、ID（Instructional Design : インストラクショナル・デザイン）の学習者がIDについて学ぶことを支援するために構築しました。初めてのの方は、[本サイトについて](#)をお読みください。

いいね！ 69 シェア ツイート

■直近イベント情報■

- 2020/04/01（水）～2020/04/27（月）
日本イーラーニングコンソシアム「eLPベーシック・eラーニングコース「第44期」開講」
- 2020/04/14（火）～2020/05/07（木）
日本イーラーニングコンソシアム【特別提供】eLPベーシック・eラーニングコース＜体験版・4講座無償提供＞
- 2020/05/09（土）
教育システム情報学会 2020年度第1回研究会「学習環境デザインと実践のモデル／学習データの分析と応用／医療・看護・福祉におけるICTを利用した学習支援／その他」@オンライン
- 2020/05/16（土）～2021/01/16（土）
日本医療教授システム学会「学習デザイン勉強会（ゴールド・メソッドを学ぶ）」@CIC東京
- 2020/05/23（土）
日本教育工学会研究会「学習・教授システムの開発・利用／一般」@函館工業高等専門学校
- 2020/05/27（水）～2020/05/29（金）
ラーニングイノベーション2020開催@東京国際フォーラム
- 2020/05/29（金）～2020/05/30（土）
第31回教育学習支援情報システム（CLE）研究発表会@オンライン
- 2020/06/06（土）～2020/06/07（日）

検索... Go

鈴木克明教授 Webサイト
都竹茂樹教授Web
Yoshi * Lab
北村圭朗准教授ホームページ
GSIS同窓会

おすすめ情報

教授システム学専攻の公開科目でIDの基礎を学習できます。おすすめ科目は以下です。

- ・基盤的教育論

コンテンツ一覧

ID ポータルは、教授システム学専攻の同窓生をはじめ、多くの関係者にご協力いただきながら、以下のコンテンツを提供しています。

コンテンツカテゴリ名	内容
イベント	ID に基づいた研究・実践が発表される学会・研究会（日本教育工学会、教授システム情報学会、ICoME 等）や、ID について学習できるワークショップ（熊本大学公開講座等）について、随時、配信しています。
ID 関連文献等	ID に基づいた研究・実践についてまとめた論文や学会報告を随時、掲載しています。
ID マガジン	ID と関連するブックレビューや熊本大学教授システム学専攻主催の「まなばナイト」等のイベントのレポートを事前登録者に対して配信、サイトへ掲載しています。尚、ID マガジンは、熊本大学教授システム学専攻の同窓生有志で構成される「ID マガジン編集委員会」によって長年、企画・運用されています。
お悩み解決 QandA	e ラーニング・授業・研修をデザインする際に出てくるありがちなお悩みをレイヤーモデル（e ラーニング、授業、研修等の質を 5 つの段階に分けて整理したもの）の 5 つのレベルごとに分類しています。「学習目標の種類によって、どんな学び方、教え方をすれば効率的か」や「知識やスキルではなく、望ましい態度を教えたい」等について、ID の観点からの解決策や関連するリソースを提供しています。
実力チェック	教授システム学専攻必修科目「インストラクショナル・デザイン I」を題材に、架空の教材企画書が提示され、学習目標や事前/事後テストの内容、前提条件等の各項目の適切性を評価する活動を通じて、授業設計に関する知識・スキルを身につけているか判断できます。
作業支援ツール	教授システム学研究センター長兼教授システム学専攻長である鈴木克明教授が執筆し、多くの人に利用されている以下の 4 つの書籍で紹介されている授業設計のための作業を支援するための機能・資料が提供されています。 1. 教材設計マニュアル 2. 授業設計マニュアル 3. 研修設計マニュアル 4. 学習設計マニュアル

サイトおよび各コンテンツへのアクセス数

以下に示すように、ID ポータルは日々、多くの方にアクセス・利用されています。

表 1：月毎のサイトへのアクセス数（2019 年 4 月～2020 年 2 月）

月	訪問者数 (IP アドレス)	閲覧された回数 (PV：ページビュー数)
2019 年 4 月	2,519	33,603
2019 年 5 月	2,715	57,566
2019 年 6 月	3,464	38,470
2019 年 7 月	4,223	78,605
2019 年 8 月	2,097	66,706
2019 年 9 月	2,206	99,731
2019 年 10 月	2,468	84,335
2019 年 11 月	2,462	62,705
2019 年 12 月	1,665	122,517
2020 年 1 月	4,729	80,361
2020 年 2 月	1,582	85,650

表 2：アクセス数トップ 3 のコンテンツ（例：2020 年 2 月の例）

ランキング	コンテンツ名	閲覧された回数 (PV：ページビュー数)	内容
1	トップページ イベントのお知らせ	2,256	ID ポータルのトップページとして、ID と関連する直近のイベント等を紹介しています。
2	ID 関連文献 学術論文 (審査有)	181	ID と関連する文献のうち、学術論文としてジャーナルに掲載されているものを紹介しています。
3	教材設計 マニュアル関連	93	教材設計マニュアルで説明されている作業を支援するためのツールを提供しています。

教育関係共同利用拠点

取組 3

公開科目



本センターでは、教授システム学専攻の
大学院科目の一部をウェブサイトで公開し、
一般の方々にも、広く学修の機会を提供しています。

本年度の取り組みの概要

本年度は、インストラクショナル・デザインⅡ（2014 年度版）を新たに公開しました。同科目は 2015 年度に全面的にリニューアルを行い、鈴木克明センター長著「研修設計マニュアル」（同年 4 月発行）をテキストにして学習する内容へ変更されました。公開科目では、それ以前の旧バージョンをそのまま公開しています。

2018 年度以降に公開した科目については、実際の学習環境により近づけるため、教授システム学専攻で用いているオープンソースの LMS（Learning Management System）である Moodle をプラットフォームとして利用しております。本年度は、公開科目専用の Moodle を設置し、利用者のアクセシビリティのさらなる向上を図りました。

また 2017 年度以前に提供を開始した公開科目の一部に、サポートが終了した Adobe Flash を用いているページがあること、特に IT 系科目については、既に提供が終了しているツールを使った課題も含まれている等、テキストの情報が古くなっているため、本年度は、公開内容の見直しや改修等の検討を行いました。これらの科目については、公開科目専用 Moodle への移し替えも含めて、次年度に引き続き検討を行う予定にしています。

図：公開科目用 Moodle（トップ画面）



公開科目一覧

【博士前期課程】

特別研究Ⅰ（2007年度版）：日本語版・英語版

特別研究Ⅰは、研究の第一段階に位置づけられた科目です。各教員の研究領域やテーマを確認しながら、自分の研究のテーマや方向性を考えるために参考にしてください。

基盤的教育論（2007年度版）：日本語版・英語版

基盤的教育論では、教育学の視点からeラーニング実践を点検するための基礎を培います。教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる科目です。

eラーニング概論（2009年度版）：日本語版・英語版

eラーニング概論は、eラーニングを教育に導入するための基礎科目です。学習心理学、認知科学、成人学習理論等の知見や、社会人教育・高等教育におけるeラーニングを実現するために必須となる着眼点を養います。本科目は、2010年度にeラーニングプロフェッショナル資格（ベーシック）への対応のため大幅にリニューアルされました。この公開版は、それ以前の内容（旧バージョン）をそのまま公開するものです。

基盤的情報処理論（2010年度版）：日本語版・英語版

基盤的情報処理論は、学部においてIT分野を未履修、またはこの分野の知識技能の強化が必要な学生に対する導入科目です。エディターを利用したHTMLの構築及びインタラクティブなWebページ構築に必要なスクリプト言語を修得するとともに、マルチメディア情報と編集加工を含めWebとの連携について、eラーニング教材の開発に必要な情報処理基礎知識（特にWeb活用）を修得します。

インストラクショナル・デザインⅡ（2014年度版）：日本語版

インストラクショナル・デザインⅡは、eラーニングを組み入れた教授システムの青写真と導入プロセスの提案、現状システムの改善計画の提案ができるようになることをめざす科目です。教材・コンテンツのニーズ分析と体系化、環境要因分析、研修以外の選択肢の検討、運用計画立案、組織変化過程の設計、資源管理法等、教授システム全体の設計と運用管理の諸技法を修得します。

【博士後期課程】

教授システム学研究総論（2015年度版）：日本語版

教授システム学研究総論は、博士後期課程の導入科目として位置づけられた科目であり、教授システム学分野における研究動向の全体像を俯瞰できるよう、各専任教員が専門性を持つテーマごとに研究動向を概観します。

各科目へのアクセス状況

各科目に対するアクセス数は以下の通りです。

* アクセス数 = 閲覧された回数 (PV : ページビュー数)

表：各公開科目（トップページ）に対するアクセス数（2019年4月～2020年2月）

科目名	Moodle 版	HTML 版
特別研究I（2007年度版）	—	378
基盤的教育論（2007年度版）	—	5,386
eラーニング概論（2009年度版）	—	647
基盤的情報処理論（2010年度版）	—	1,320
教授システム学研究総論（2015年度版）	4,879	—

※ インストラクショナル・デザインⅡは3月公開のため、表には含めていない。

基 盤 的 教 育 論

担当教員： 鈴木克明、渡邊あや
開講年次： 1年前期

後続科目： eラーニング実践演習Ⅰ、特別研究Ⅰ

概要： 教育学の視点からeラーニング実践を点検するための基礎を培う。教員免許課程における教育原理・教育方法論・教育心理学のエッセンスと教授設計理論の基礎について短期間でカバーできる。教育学の基礎知識が不足している入学生のための補講的基礎科目。

注記： この科目は、2008年度からはカリキュラム改訂により「自由科目」となりましたので、修了要件の単位としてはカウントされません。ただし、上記の「後続科目」を受講するための要件になりますので、履修免除者以外は、1年後期開始前には完了しておく必要があります。ご注意ください。

履修上のアドバイス： 過年度の受講生からの感想として4ブロックはとっつきにくかったとの意見が寄せられています。1ブロック終了後は、2・3・4ブロックのどれから学習を進めても構いません。興味を持ってそんなことからやる、興味を持ってそんなことはあとに残してご褒美にする、など好みに応じて作戦を立てて取り組んでください。

テキスト：ジョン・デューイ（1938）『経験と教育』講談社学術文庫（市村尚久訳、2004）¥798
※このテキストは（第11・12回）で使いますので、用意してください。

参考書：沼野一男（1986）『情報化社会と教師の仕事』国土社（教育選書8）¥1,377
※この参考書の一部は第13回に関連します。入手が困難な場合は、ご相談ください。鈴木への尊敬する師匠の名著です。

～お知らせ～
2009/04/17
第1回のショートビデオの形式を変更し、更新しました。（内容は同じものです。）

※ 基盤的教育論のシラバスは[こちら](#)からご覧ください。

1 ブロック [\[1\] イントロダクション](#)
【第1回】～【第2回】

3 ブロック [\[3\] 学習心理学の3大潮流](#)
【第7回】～【第10回】

5 ブロック [\[5\] まとめと振り返り](#)
【第14回】～【第15回】

2 ブロック [\[2\] 学習指導・評価論](#)
【第3回】～【第6回】

4 ブロック [\[4\] 教育学の2大潮流](#)
【第11回】～【第13回】

下記の課題のすべてに6割以上得点することが単位取得の最低条件です。

【課題1】 リフレクションペーパーⅠ

講義第2回課題としてアップロードする。受講前の教育に関する自説（考え方、哲学、見方、やり方など）をまとめる。つまり、現在（学習指導に関する）職務を実施する際のやり方、明示的・暗示的に寄せている期待、どうしてそのような

図：公開科目「基盤的教育論」のトップ画面

教育関係共同利用拠点

取組 4

講師派遣



本センターではインストラクショナル・デザインについて学ぶ機会を
提供するために、講師派遣をしています。

本年度の取り組みの概要

昨年度に引き続き「FD研修講師・大学教育設計コンサルタント派遣」の継続・拡大を図りました。他の取り組みとも連携しつつ、可能な限り、受講者参加型のFD研修を実施しました。

講師派遣として、5名の教授システム学研究センターの教員が、講師として、大学教職員対象の研修を20件、その他を対象とした研修を18件、のべ、38件行いました（表1参照）。大学教職員対象の研修では、大学教員627名、大学職員93名、大学院生34名が本センターの研修を受講しました。一般・その他の研修では、対象者を設定していない一般を対象とした研修、その他として、専門学校教員、医療関係者対象の研修について整理しました。一般・その他の受講者は534名で、本年度の講師派遣による受講者数は、1917名となりました。

研修の内容は、授業設計、教材設計はもちろん、人材育成、学習環境デザイン、創発思考、研究成果の普及・活用、アクションプラン作成、コンピテンシー等、多岐に渡りました。研修の規模も、10数名の研修から、100名や300名を超える研修がありました。主催者も、大学だけでなく、企業、官公庁、各種財団、学会等で、それぞれの団体のミッションや課題に合わせ、研修を行いました。また、本年度は海外での研修も2件ありました。

表2は学校種別による参加者内訳を示しています。大学教職員対象の研修をみると、大学教員のうち、国立大学教員が122名、私立大学教員が360名、公立大学教員が55名でした。大学教員の他に、大学共同利用機関法人15名、民間独立行政法人等が5名でした。外国の研究機関からの参加者は、115名となり、日本人以外の受講者も多くなりました。

また、地域別にみると、大学教職員対象の研修では、地域が特定できない不明を除き、九州が333名で一番多く、次いで多かったのは、関東からの187名でした（表3参照）。一般的に大人数を対象とした研修やセミナー等では、受講者の地域を特定することが難しく、不明数は大学教職員対象研修で531名、一般・その他対象研修で、256名となっています。一般・その他でも、不明を除くと、九州からの受講者が117名で一番多くなりました。

最後に、本センターでは、研修における講師派遣に加えて、コンサルティングの事業も推進しています。本年度は、鈴木センター長により、外部委員など6件の派遣を行いました。

本年度も、依頼者のニーズに合わせ、より能動的で積極的に参加でき研修を提供してきました。次年度も、さらに、受講者自身が学ぶ研修、研修後も学び続けられるような研修を提供していきたいと考えています。

表 1：研修の対象者

	大学教職員対象		一般・その他対象	
講師派遣件数・ 受講者数	19 件 (1 件は職員対象)	1383 名	18 件	534 名
大学教員	19 件	627 名	0 件	0 名
大学職員	5 件	93 名	0 件	0 名
大学院生	3 件	34 名	0 件	0 名
その他	9 件	629 名	18 件	520 名

表 2：学校種別による受講者内訳

	大学教職員対象 (名)	一般・その他対象 (名)
国立大学	122	6
私立大学	310	8
公立大学	55	0
大学共同利用機関法人	15	0
民間独立行政法人など	5	0
外国の研究機関	115	0
その他	221	304
不明	490	216
計	1383	534

表 3：地域別による受講者内訳

	大学教職員対象 (名)	一般・その他対象 (名)
北海道	37	0
東北	28	0
関東	187	25
中部	30	57
近畿	1	79
中国	36	0
四国	12	0
九州	333	117
海外	134	0
その他	4	0
不明	531	256
計	1383	534

表 4 : 講師派遣の事例

研修日	講師	研修主催者	研修名	研修場所
2019/5/29	鈴木克明	日経 BP 社主催	ラーニングイノベーション 2019	東京国際フォーラム
2019/6/15	鈴木克明	全日本患者安全組織 文化学習支援財団	シンポジウム「心肺蘇生教育 AHA 提言を読み解く」	東建ホール（名古屋 市）
2019/6/20-21	鈴木克明	国際交流基金パリ日 本文化会館日本語事 業部	2019 年度欧州日本語教育研 修会	国際交流基金パリ 日本文化会館
2019/6/25	鈴木克明	タナベ経営(大阪)	人材開発研究会	タナベ経営(大阪)
2019/7/19	鈴木克明	東北大学	2019 年度東北大学 大学教員 準備プログラム・新任教員プログラ ム	東北大学
2019/10/5	鈴木克明	The Japan Foundation, Kuala Lumpur (JFKL)	第 16 回マレーシア日本語教育 国際研究発表会	マラヤ大学、クアラル ンプール
2019/10/10	鈴木克明	南九州大学	南九州大学 FD 講演会	南九州大学(宮崎 市)
2019/11/7	鈴木克明	東京通信大学	FD 研修会	東京通信大学
2019/12/22	鈴木克明	日本医療教授システム 学会	「医療 ID セミナー」	川崎医科大学附属 病院臨床教育研修 センター（岡山市）
2020/2/13	鈴木克明	熊本経済同友会（熊 本市）	人材育成事例検討会セミナー	熊本経済同友会 （熊本市）
2020/2/25	鈴木克明	株式会社 デンソー	社内セミナー	株）デンソー大府 技術研修所（愛知 県）
2020/3/6	鈴木克明	日本語教育・教材開 発・実践教育研修共 同利用拠点事業	「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト～検証と授業への 応用～」	東京外国語大学留 学生日本語教育セ ンター（東京都）
2020/3/13	鈴木克明	京都大学大学院医学 研究科	現場で働く指導医のための医学 教育学プログラム—基礎編 (Foundation Course for Medical Education)	京都大学大学院医 学研究科医学教 育・国際化推進セン ター
	鈴木克明	一般財団法人 LINE みらい財団評議員	一般財団法人 LINE みらい財団 評議員	
	鈴木克明	エチオピア国水技術機 構	JICA 短期専門家派遣	アジスアベバ
	鈴木克明		スーパーサイエンスハイスchool 運 営指導委員会委員	熊本県立第二高等 学校
	鈴木克明		研修評価委員会委員	(株) 農林中金アカ デミー
	鈴木克明		AP 外部評価委員会委員	千歳科学技術大学
	鈴木克明		ソフトウェア・シンポジウム 2019 in 熊本 プログラム委員	

2019/4/5	都竹茂樹	国内電機メーカー・人材開発センター	研修設計入門セミナー ～自ら学ぶ人材を育成するために～	国内電機メーカー研修所
2019/7/23, 2019/9/3	都竹茂樹	熊本経済同友会	人材育成セミナー	熊本 KKR ホテル
2019/9/13	都竹茂樹	北海道大学高等教育推進機構 高等教育研修センター	キャンパスにおける身体のケア	北海道大学
2019/9/17	都竹茂樹	日本赤十字九州国際看護大学	学習効果を高めるアクティブ・ラーニング推進のための授業設計	日本赤十字九州国際看護大学
2019/10/29	都竹茂樹	宮崎大学	宮崎大学 FD	宮崎大学
2019/11/23	都竹茂樹	Apple	ADE (Apple Distinguished Educator) Meeting	Apple オフィス (六本木ヒルズ)
2019/12/14	都竹茂樹	熊本保健科学大学	令和元年度 臨地実習合同研修会	熊本保健科学大学
2020/2/8	都竹茂樹	福岡県看護協会	プレゼンカアップ研修 (保健師職能企画研修)	ナースプラザ福岡
2020/2/11	都竹茂樹	福岡県理学療法士会	令和元年度福岡県介護予防推進リーダーステップアップ研修会	久留米シティプラザ 5F 大会議室
2019/6/21	北村士朗	一般財団法人私学研修福祉会	創発思考プログラム	AP 市ヶ谷 Learning Space
2019/7/19	北村士朗	農林水産省	令和元年度 農林水産関係若手研究者研修 研究成果の普及活用ワークショップ	農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
2019/7/19	北村士朗	農林水産省	令和元年度 農林水産関係若手研究者研修 アクションプラン作成ワークショップ	農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
2019/12/20	北村士朗	農林水産省	令和元年度 農林水産関係若中堅研究者研修 研究成果の普及活用ワークショップ	農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
2019/12/20	北村士朗	農林水産省	令和元年度 農林水産関係若手研究者研修 アクションプラン作成ワークショップ	農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
2019/8/9	合田美子	International Association for Language Learning Technology (IALLT) and the Japan Association for Language Education and Technology (LET)	FLEAT 2019	早稲田大学
2019/8/20-22	合田美子	JACET	The 2nd JACET Summer(46th) and English Education(7th) Joint Seminar (Tokyo, 2019)	玉川大学
2019/9/19-20	合田美子	全国専門学校教育研究会	ICT 活用研修	YIC 京都

2019/10/24-25	合田美子	全国専門学校教育研究会	ICT 活用研修	新潟コンピュータ専門学校
2019/11/12	合田美子	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会	第 29 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会	名古屋国際会議場
2019/11/6	合田美子	デジタルハリウッド	ICT 活用研修	国際動物専門学校
2019/11/7-8	合田美子	全国専門学校教育研究会	ICT 活用研修教員養成研修	エッサム神田ホール
2019/8/5,6,27,28,29	平岡斉士	愛知県看護研修センター	平成 31 年度看護教員看護教育学研修会	愛知県看護研修センター
2019/9/20-21	平岡斉士	島根県立大学	島根県看護教員継続研修	浜田医療センター
2019/10/01-02	平岡斉士	電気通信大学	大学教育センター FD 講演会	電気通信大学

派遣事例 1

講師：合田美子

実施日：2019年8月20日(火)～8月22日(木)

場所：玉川大学 大学教育棟 2014 (〒194-8610 東京都町田市玉川学園六丁目1番1号)

研修名：JACET 第2回ジョイントセミナー

参加者：約100名

JACET(The Japan Association of College English Teachers, 大学英語教育学会)主催、第2回ジョイントセミナーで講師を行いました。ジョイントセミナーは、JACETの第46回サマーセミナーと第7回英語教育セミナーを統合した研修で、8月20日(月)から8月22日(水)までの3日間、玉川大学大学にて開催されました。セミナーでは、講師による講義やディスカッションに加えて、セミナー参加者によるポスターセッションや賛助会員によるプレゼンテーションと教材等の展示、さらにJACET研究会による分科会やシンポジウムがありました。セミナー全体のテーマは、ELT materials development and use: Linking theory and practice (これからの英語教材の開発と活用—理論と実践の連携を求めて)で、私の他に Willy Renandya 先生 (シンガポール国立教育学院)、小田 眞幸先生 (玉川大学)が講師を務められました。諸外国の教育研究機関に在籍していらっしゃる方々も含め、大学英語教員や英語教育を専攻している学生、英語教材を開発している企業の方々から、約100名の参加がありました。

Willy 先生は、エンゲージメントとリーディングについて、小田先生は、政策と教材の関係について講義されました。私の講義では、「テクノロジーで実現するアダプティブラーニングのための ELT 教材の開発と活用法」と題し、ハンズオンのワークショップ形式で進めました。受講者には、事前に PC やタブレットを持参するよう伝え、講義中には、これまでの研究で開発してきたアプリやシステム等、実際にいろいろな教材を使い体験していただくようにしました。例えば、任意の web 上の英語の文書や、テキストの文書を取り込み、学生のレベルに合わせて簡単に単語学習の支援を備えた教材とするアプリ、VOCALS(科研課題：16H03457)を試してもらいました。学生の機能、教員の機能について、それぞれで何ができるのか、確認しながら使ってもらいました。その中で、教材開発では、学生と教員からの視点が必要だということを再認識していただきました。また、オンライン上で協調学習を行うための Moodle のモジュール C⁴(シークウッド, 科研課題：19H01716, 18K18657)を使って、参加者同士で、実際に、オンラインコミュニケーションをしていただきました。本システムは、探求の共同体の理論から機能が設計されており、オンラインでのコミュニケーションを円滑に行うための社会的存在感を可視化する仕組み等が組み込まれていま



講義中に教材を実際に体験している参加者

した。また、認知的存在感を高める工夫として、知識構造化マップを作成、共有でき、グループのチャットからの学びをサポートするように設計されていることを確認していただきました。受講者は、教員がほとんどでしたが、学生になりきり、自己紹介に絵文字を使ったり、チャットから知識構造化マップを作成したり、オンラインでのコミュニケーションを楽しんでいました。テクノロジーを活用することで、どのような教材開発が可能か、または、どのような教材を作りたいか、同じ興味を持つ他の先生と議論することができました。



学会関係者、セミナー講師、参加者による記念写真

また、最終日のディスカッション II において、内藤永先生（北海学園大学）と渡辺敦子先生（文教大学）とともに、パネリストとして参加しました。本セッションは、JAAL in JACET (The Japan Association of Applied Linguistics)が企画しており、テーマは、「教材開発のこれから」でした。応用言語学研究を発展させるべく、昨年よりなされている JAAL in JACET 学術交流集会の成果をもとに、教材開発のこれからを考えることが目的でした。英語教育に対する社会におけるニーズの変化や多様な学習者の実態に対応する教材が求められ、IoTをはじめとする技術革新をはじめ、教育環境の多様化も進んでいます。JAAL in JACET 学術交流集会のねらいとなっている、産学連携研究、研究と実践の融合にもとづき、JACET 第4次実態調査や JAAL in JACET 学術交流集会で出された課題について、パネリストがそれぞれの専門に即したコメントをしました。私は、教材開発に際し、研究と実践の融合の事例紹介、新しい技術とこれまでの理論の関係等の問題を提起しました。これからの教材開発のあり方をパネリストからの発題とフロアからの意見交換をもとに論議を行いました。フロアからも活発な質問や意見が出され、これからの教材開発には、多様な視点や専門性を重視する必要があることについて確認されました。

派遣事例 2

講師：平岡 斉士

実施日：2019 年 8 月 5-6 日と 27-29 日

場所：愛知県看護研修センター

研修名：平成 31 年度看護教員看護教育学研修会

タイトル：愛知県看護研修センター：インストラクショナル・デザインの手法を用いた魅力ある授業づくり

参加者：26 名

この研修は、2014 年度から継続的に行っている看護教員を対象とした研修です。研修は全 5 日で、前半 2 日、中日、後半 2 日に分けて行われました。前半 2 日と後半 2 日は同じ参加者による一連の研修ですが、中日は過去にこの研修を受けた人も参加するフォローアップ研修となっていました。そのため以下の報告では、前半と後半の参加者を「通常研修参加者（17 名）」、中日の参加者を「フォローアップ参加者（9 名）」と記載することにします。

前半 2 日は ID の基本的な考え方を提示し、それを自身の授業に採用するかどうか、採用するならばどのように採用するかについてペアで検討してもらうことを繰り返し、そこで生じた「もやもや」を解消するためにグループでディスカッションと質疑応答を行いました。各日の最後には講師への質問を記述させた「もやもやシート」を提出してもらい、講師は翌日の最初に、全ての質問に回答した紙を配布しました。前半終了後、後半の開始までに前半で検討した内容に関して改めて検討し、自身の授業改善案を準備することを後半の事前課題といたしました。

中日のフォローアップ研修では、フォローアップ参加者に事例を紹介してもらい、その事例について通常研修参加者も交えて改善案を議論いたしました。そこでの議論内容は、通常研修参加者にとっては「先輩の取り組み」となるため、フォローアップ参加者だけでなく、通常研修参加者からも「参考になった」というコメントがありました。

後半 2 日はこれまでの学習内容を踏まえて、ペアの相手と相談しながら各自の授業改善案を修正し、最終レポート（授業改善計画と研修での学びの振り返り）として仕上げていく時間としました。その間は、受講者のタイミングで講師に相談できるようにし、受講者は相談結果を踏まえて最終レポートを作成することを繰り返しました。最終日のもやもやシートにはほぼ質問はなく、大半のシートには、学びの成果の感想が書かれていました。最終日ならびに最終日から数週間以内に、すべての通常研修参加者から、合格基準を満たした最終レポートが提出されました。

教育関係共同利用拠点

取組 5

オンラインプログラム



本センターでは 2019 年から、授業設計について学習するオンラインプログラム
「教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）」
を公開しています。

本年度の取り組みの概要

本取り組みでは、高等教育機関の授業における学習目標、評価方法、授業方法の設計に関する知識・スキルを身につけるためのオンラインプログラムを設計・開発しています。

基礎からの積み上げ方式による暗記から始まる専門家育成の枠組みを脱却し、学修の有用性が最初から感じられる科目デザインを実現することが社会人の学び直しにも有効であり、かつ社会人経験がない学生にとっても有用であることを前提としており、本年度は以下のオンラインプログラムを開発・公開しました。

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

<https://kyoten1.cica.jp/moodle/>

本オンラインプログラムには無料版と有料版の2種類があり、無料版を2019年3月に公開しました。2019年11月からは有料版（第1期）の募集を行い、15名のかたに申し込まれ、10名が修了されました。

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）トップ画面

日本語 (ja) Log in

教育改善スキル修得オンラインプログラム（科目デザイン編）

ANNOUNCEMENTS undefined

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

[学習の進め方](#)

モジュール1：大学教育に関する5つの物語

モジュール1では、高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論しましょう。

[アクセスする](#)
アカウントなしで閲覧可能

モジュール2：認知的発達を促す授業方法

モジュール2では、『パラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。

[アクセスする](#)
要ログイン

モジュール3：評価と単位認定の見直し

モジュール3では学習の評価について学習します。期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった問題について学習します。

[アクセスする](#)
要ログイン

モジュール4：学習目標の高度化

モジュール4では、学習目標について学習します。『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といったトピックについて学習します。

[アクセスする](#)
要ログイン

ナビゲーション

[ホーム画面へ戻る](#)

[進捗管理画面へ戻る](#)

[学習状況証明書を発行
\(無料ユーザー向け\)
証明書はいつでも発行可能](#)

[学習状況証明書を発行
\(有料ユーザー向け\)
有料ユーザーのみアクセス
可能です。証明書はいつでも
発行可能。](#)

関連サイト

本プログラムは、熊本大学教授システム学研究センターが運営しています。

RCIS 教授システム学研究センター
Research Center for Instructional Systems

熊本大学大学院 工学部 教授システム学専攻
社会文化科学研究科 教授システム学専攻

ご意見はこちら

本プログラムを学習していてお気づきの点、ご意見がございましたら、下記のボタンよりご連絡ください。

プログラムの学習内容（有料版と無料版）

オンラインプログラムでは、大学の授業設計について、主に学習目標、評価方法、授業方法の3点から学習し、学習した内容を元に、自身が所属機関で担当している授業を修正します。また、ミネルバ大学の事例等を紹介し、今後の大学についての考え方についても議論します。

無料版の学習者は各モジュールで知識を学習、自身が学習したことを身につけることができたのかを確認するクイズを受験することができます。

一方、有料版学習者に対しては、無料版の範囲に加え、自身の担当科目の修正案に関する他の学習者とのディスカッション、教員による添削が受けられる課題提出まで提供されます。

また、有料版学習者に対しては2回の対面学習が開催され、各対面学習では学習者がモジュールを学習しているときに感じた疑問点を共有、議論する機会を設けています。

各モジュールで学習しながら自身の担当科目を修正することで、本プログラムの修了後、すぐに改善した状態の自身の科目を実施できるようにしています。

表：各モジュールの対象者及び内容

モジュール名	対象者	内容
モジュール1 大学教育に関する5つの物語	無料版 有料版	高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論します。
モジュール2 認知的発達を促す授業方法	無料版 有料版	『パラレルセッション』や『一人でできることは授業ではやらない』といった学習者の認知的発達を踏まえた支援について学習します。
モジュール3 評価と単位認定の見直し	無料版 有料版	期末テストの成績が悪い、実技の授業をどのように評価すればよいのかといった評価に関する問題について学習します。
モジュール4 学習目標の高度化	無料版 有料版	『暗記ではなく知識の応用を目指す』や『学問領域に依存しない学び方を学ぶ』といった学習目標に関する問題について学習します。
モジュール5 最終課題	有料版	モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

アクセス数

2019年3月から2020年2月までの間に、延べ7060名（IPアドレス）がオンラインプログラムへアクセスしました。各モジュールへの訪問者数および無料版プログラムの学習を修了し、デジタルバッジを取得した学習者の数は以下の通りです。

モジュール名	訪問者数 (IP アドレス)	無料版プログラム： デジタルバッジ取得者数
モジュール1：大学教育に関する5つの物語	2491	49名
モジュール2：認知的発達を促す授業方法	299	15名
モジュール3：評価と単位認定の見直し	243	35名
モジュール4：学習目標の高度化	257	23名

有料版プログラム

有料版では、各モジュールでの学習を進めながら、実際に所属機関で担当している科目（大学院生の場合は将来担当したい科目）を改善していきます。有料版プログラムには以下の特徴があります。

<特徴1：相互レビューに基づく学習>

本プログラムでは各モジュールで提出する課題等はすべて、他の学習者との相互レビューを行いながら、質の改善を行っています。

<特徴2：ポートフォリオの活用>

本プログラムでは、各モジュールで提出する課題や自身の科目のシラバス等をポートフォリオにまとめるお手伝いをしています。そのポートフォリオを相互レビューや対面ワークショップ等で他の学習者と共有します。最終的にはポートフォリオを誰でも閲覧可能な形で公開できるようにして、発行される履修証明書と併せて、学習者自身のキャリアアピール等で活用していただくことを想定しています（公開は任意）。

<発行される証明書>

本プログラムでは、すべての学習を完了し、最終期限日までに合格することで文部科学省の制度に基づいて熊本大学から履修証明書（紙媒体・デジタル媒体）が発行されます。学習途中でも（無料版でも）学習状況証明書（デジタル媒体）が発行されますが、これは文部科学省の履修証明制度に基づくものではありません。

また、履修証明書（デジタル媒体）には任意で本プログラムで作成を支援するポートフォリオへのリンクを埋め込むことができ、将来、自身の学習についてアピールする際に活用することができます。

有料版プログラム（第1期）の開催

有料版プログラムについては2019年11月から募集を開始し、10名の方が修了され、履修証明書を取得されました。10名の所属に関する内訳は以下の通りです。

- 高等教育機関教職員：9名（大学8名、専門学校1名）
- 医療機関：1名
- 高等教育機関学生：5名



図：履修証明書（デジタル版）

「自律学修支援編」の公開開始

履修証明制度による講座提供を開始した「科目デザイン編」の続編として、「自律学修支援編」の提供を開始しました。大学生の自律的な学びを支援するために授業にどのような要素を盛り込むことができるかについて、様々な ICT 活用のヒントを提供するとともに、『学習設計マニュアル』を教員の立場から読み進めていくというコンセプトで徐々に整備を進めていきます。令和 2 年度中には、無料版と有料版の公開を完了し、履修証明制度による運用を開始する予定です。

図：教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学修支援編）トップ画面

教育改善スキル修得オンラインプログラム（自律学習支援編）

ホーム画面

初めてアクセスされた方へ

本教材へようこそ。まず、右のボタンをクリックして、このプログラムの学習の進め方を一緒に確認しましょう。

学習の進め方

モジュール1：大学教育に関する5つの物語

モジュール1では、高等教育に関する5つの物語を紹介し、次世代の大学についての考え方を説明します。これまでの大学の常識を改めて見直し、新しい大学のイメージについて議論しましょう。

アクセスする

アカウントなしで閲覧可能

モジュール2：自学自習を促すICT活用

モジュール2では、学習者に自学自習を促すためにICTで何ができるのか、その手段を学び、実際にICTを導入した授業設計ができるように学びます。

アクセスする

要ログイン

モジュール3：学びの場を作る（学びの場の提供）（6月公開予定）

モジュール3では学習者に学びの場を提供するアイデアを学び、それを取り入れた授業設計ができるように学習します。

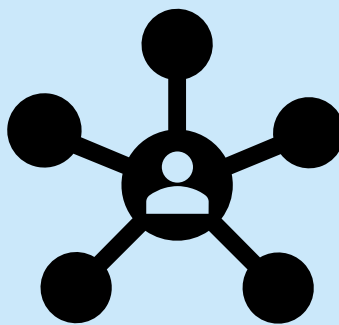
モジュール4：学習スキルを学ぶ機会の付与（7月公開予定）

モジュール4では、学習スキルのノウハウを学び、学習者に対し、そのスキルを学ばせる機会を授業内でどのように提供していくのが設計できるように学びます。

モジュール5：最終課題（8月公開予定）

本プログラムの最終課題として、モジュール1からモジュール4で学習したことを振り返り、自身の科目を修正します。

(2) 持続的な 産学共同人材育成システム 構築事業



**文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」
(2019 年度-2023 年度) において、
今年度、東北大学を代表校とし、熊本大学、大阪府立大学、立教大学の計 4 大学が
連携して実施する取組「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」の
運営拠点及び中核拠点として採択されました。**

事業の概要と今年度の取り組み

文部科学省の「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」（2019年度-2023年度）において、東北大学を代表校とし、熊本大学、大阪府立大学、立教大学の計4大学が連携して実施する取組「創造と変革を先導する産学循環型人材育成システム」が、運営拠点及び中核拠点として採択されました。

2019年9月25日：4大学共同プレスリリース内容

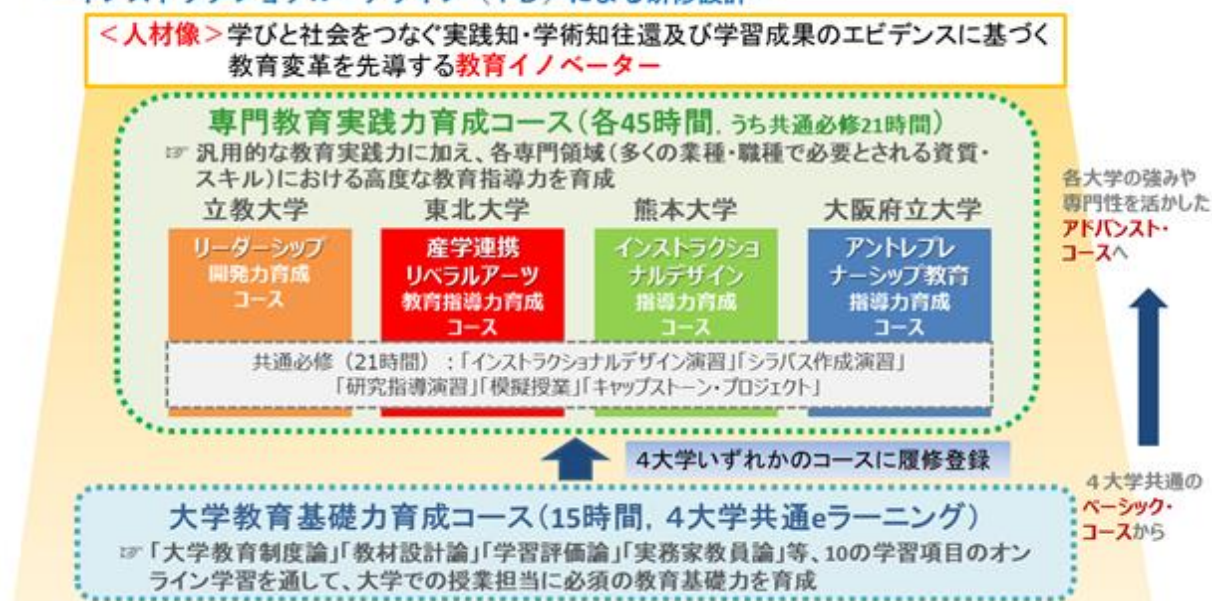
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/wp/wp-content/uploads/2019/09/ce93e07903c96aa62239e6e812bed1d5.pdf>

本センターは本事業の中核拠点および運営拠点として、以下の事業を担当します。

中核拠点

産学連携教育イノベーター育成プログラム（履修証明）

～インストラクショナル・デザイン（ID）による研修設計～



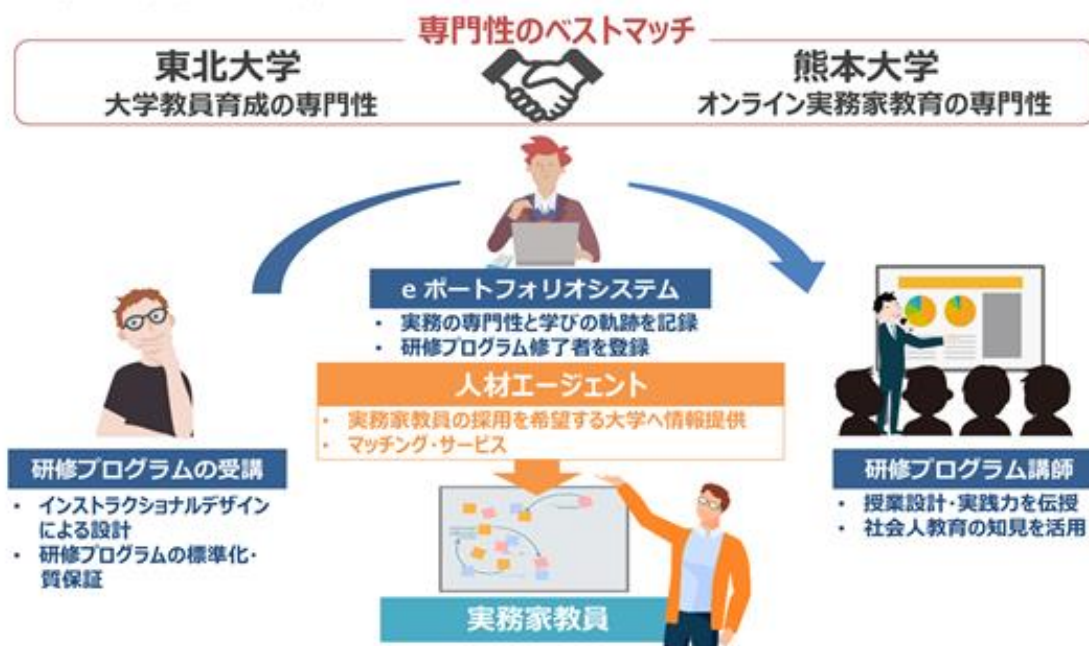
本センターは中核拠点の一つとして、「大学教育基礎力育成コース」および「専門教育実践力育成コース：インストラクショナルデザイン指導力育成コース」の設計・開発を進めています。

今年度は、2020年度の開講に向け、東北大学と協力して「大学教育基礎力育成コース」の設計および開発を進めました。

運営拠点

実務家教員育成・活用ナショナルシステム

～人材と知の往還のための人材エージェント～



本センターは運営拠点として、「大学教育基礎力育成コース」および「専門教育実践力育成コース」の修了者と実務家教員の採用を検討している大学間のマッチングを行うため以下のシステムの構築へ協力しています。

ポータルサイトの開発・運用	事業全体の情報発信
人材エージェント業務	全ての研修の修了者データベースを構築し、大学とマッチング
研修プログラムの質保証	全研修プログラムの質保証のため、拠点間で標準化を推進等

連携研究組織

連携研究員



本センターでは多様な分野の組織・人材と協力して
研究及び実践を行っています。

連携研究組織一覧

- 株式会社 ベネッセコーポレーション
- 熊本経済同友会
- 株式会社 農林中金アカデミー
- 株式会社ソシオテック研究所
- 大塚製薬株式会社
- サンライトヒューマン TDMC 株式会社
- リーブ株式会社
- 株式会社 NHK 出版
- 富士通ラーニングメディア
- 特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソシアム
- アルー株式会社
- 東京都ビジネスサービス株式会社
- デジタルハリウッド株式会社

連携研究事例：

「傾向スコアマッチングを用いた自動運転レベル 3 に関する教材の効果検証」

職業能力開発総合大学校 新目真紀

本センターとの連携研究として、交通安全の教育を担う者による一般市民向けの講習現場での教育方法について研究しています。

▶ **ファイルを開く**

*** 上記ボタンをクリックすると、発表資料へアクセスできます。**

連携研究員

連携研究員（一般）（合計：19名）：五十音順

氏名	所属機関と研究テーマ
岩永康之	米盛病院 インストラクショナルデザイン、インストラクションチェックリスト
大石奨	豊田市消防本部 医学者教育 消防職員教育
奥典宏	十日市場こどもクリニック 舌下免疫療法、保護者教育
甲斐晶子	桜美林大学・慶應義塾大学・ 熊本大学教授システム学専攻非常勤講師 学びの系統性担保と学習者の興味・関心への適合を両立させた 学習支援環境の開発研究
川村和美	シップヘルスケアファーマシー東日本株式会社 コンピテンシー開発、評価票開発
北川周子	株式会社エデュプレイ Moodle、LINE@
片野俊行	イノベーションをもたらす組織構造の研究
佐藤久恵	千代田区役所 地域包括ケアシステムの構築に寄与する地域ケア会議運営チュートリアル の検討
三宮有里	順天堂大学 看護職者の自律的学習支援、学習する組織に関する研究
鈴木伸子	社会人学生の研究スキル、企業教育における研修設計
高橋暁子	徳島大学・熊本大学教授システム学専攻非常勤講師 教育設計（特にオンライン教育）、教育システム開発
竹岡篤永	明石工業高等専門学校・熊本大学教授システム学専攻非常勤講師 ストーリー中心型カリキュラム、教育設計（特にオンライン教育）、教育 システム開発
土屋理恵	日本ウェルネススポーツ専門学校広島校 日本語教育、教師研修、専門的な学習共同体
豊場沢子	看護教育、教授方略
西村恭子	株式会社 HRJ 行動変容を促進する研修デザインの研究
根本淳子	明治学院大学

森田晃子	サンライトヒューマン TDMC 株式会社・熊本大学教授システム学専攻非常勤講師 成果につながる企業内教育の仕組みづくり
森田淳子	東京工業大学 ID、日本語教育、教師研修
山本文枝	情報メディアデザイン科目生におけるプレゼンテーションの練習とその効果

連携研究員（博士後期課程学生）（合計：28名）：五十音順

氏名	研究テーマ
天野慧	行動につなげるための学習支援デザインに関する研究
石田百合子	専門職の自己研さんを支援するための職場内教育プログラムの開発
石井嘉明	遠隔学習者支援のための可視化に関する研究開発
市村由起	MOOCs デザイン、学習の質を高めるコース設計
大庭小百合	研修開発、キャリア形成支援
笠村淳子	
カッティング美紀	e ポートフォリオを運用した短期海外プログラムの学習成果を示すエビデンスの特定・収集・評価とアセスメントシステムの構築
菊内由貴	事例演習中心の独習型がん看護研修の臨床応用の促進方略の確立
クハルク アレクセイ	—
小林菜穂子	—
齊藤千恵子	インストラクショナルデザインを活用した授業コンサルティング支援ツールの構築
篠塚麻衣子	—
篠原信夫	医療情報学教育 e ラーニングの学習効果を高めるための電子カルテの利用についての研究
杉木大輔	ICT を活用した医療現場における学びの支援設計に関する研究
鈴木真保	—
鈴木雄清	ARCS 動機づけモデルに基づく学習意欲を高めるための授業改善支援システムの構築
須曾野仁志	学習者によるナラティブを重視したデジタルストーリーテリング学習環境のデザイン
田中洋一	アクティブラーニングのために心理的に安全な場を作る学習環境デザイン
長岡千香子	“使いやすさ”に着目した学習者間のアイデア・学習リソースの共有を支援するシステムの開発
中前雅美	京都保健衛生専門学校 臨床現場での行動変容を目標とする学習方略の確立について
政岡祐輝	看護師の内省支援、メタ認知能力の促進・育成、実践コミュニティ

増山純二	救急看護師を対象にしたリフレクションツールソフトの有効性について
三井一希	初等教育機関における授業設計支援システムに関する実証的研究
八木街子	看護実践能力育成のためのストーリー型 e ラーニング教材の開発研究
谷塚光典	教職 e ポートフォリオの効果的な活用方法の開発
吉村友希	—
ルー ペトラス ウィレム	文化的な知性を開発するためのオンライン学習をデザインします
渡邊浩之	学生チューターの成長を促すツールの設計と評価

連携研究事例：

甲斐晶子

留学生を対象とした低次段階のリフレクション記録支援システム「Reflection-Bot」の設計と開発

▶ファイルを開く

*** 上記ボタンをクリックすると、発表資料へアクセスできます。**

研究成果



本センターでは積極的に学会等での発表を行っています。

研究成果リスト

学術論文

- 鈴木克明（2020）我が国の教育工学研究とインストラクショナルデザイン研究の今後に寄せて [総説]. 日本教育工学会論文誌, 43(3) : 187-196.
- 鈴木克明（2019）インストラクショナルデザインー学びの「効果・効率・魅力」の向上を目指した技法－[解説論文]. 電子情報通信学会通信ソサイエティマガジン b-plus 50 : 110-116.
- 中野裕司（2019）全学的学習支援システムの連携とそれに基づく安否確認システムの開発[招待論文]. 情報処理学会論文誌教育とコンピュータ(TCE), 5(2) : 12-19.
- 豊場沢子・平岡斉士・鈴木克明・都竹茂樹（2020）看護技術（運動技能）の教授方略におけるデザイン原則の開発. 医療職の能力開発（日本医療教授システム学会論文誌）, 7(1) : 12-26.
- 増山 純二・都竹 茂樹・戸田 真志・平岡 斉士・鈴木 克明（2019）救急初療看護における看護過程学習の足場かけの設計. 教育システム情報学会誌, 37(1) : 32-43.
- 渡邊浩之・鈴木克明・戸田真志・合田美子（2019）実践と内省を結びつけるチューター育成プログラムの開発. 教育システム情報学会誌, 36(4) : 257-262.
- 石田百合子・根本淳子・松葉龍一・平岡斉士・鈴木克明（2019）同僚モデルを適用したアクティブ・ラーニング推進責任者研修の開発とデザイン原則の提案－国立高等専門学校機構での事例から－. 教育システム情報学会誌, 36(4) : 243-256.
- 甲斐晶子・松葉龍一・合田美子・和田卓人・鈴木克明（2019）スマートスピーカーを用いた日本語パターンドリルシステム「受身の練習」の設計と実装. 教育システム情報学会誌, 36(3) : 203-208.
- Amano, K., Tsuzuku, S., Suzuki, K., & Hiraoka, N. (2019) Three-stage design of a question-making activity to refine pre-training preparation in a blended training program. *Journal of Information and Systems in Education*, 18(1): 45-50.
- 高橋暁子・杉浦真由美・甲斐晶子・富永敦子（2019）日本におけるインストラクショナルデザイン研究の動向（2003-2018）. 日本教育工学会論文誌 43(3) : 253 - 265

書籍

- Suzuki, K. (2020). Go with the flow, whenever it comes (Chapter 17). In C. T. Miller, & A. A. Pina (Eds.), *Lessons in leadership in the field of educational technology*. Springer Nature Switzerland AG.
- Nemoto, J. & Suzuki, K. (2020). A systems thinking approach to a story-centered curriculum design and application in Japanese higher education. In J. M. Spector, B. B. Lockee, & M. D. Childress (Eds.), *Learning, design, and technology: An international compendium of theory, research, practice and policy*. Springer, Cham [DOI https://doi.org/10.1007/978-3-319-17727-4_94-1]

国際会議

- Kubota, S.I., & R. Matsuba, R. (2020.3) Considerations for classification of learning behavioral types focusing on periodical online quizzes in blended learning course. *14th International Technology, Education and Development Conference*.

- Kita, T., Nagaoka, C., Hiraoka, N., & Dougiamas, M. (2019.10) Implementation of Voice User Interfaces to Enhance Users' Activities on Moodle. *4th International Conference on Information Technology (InCIT)*, Bangkok, Thailand, 104-107.
- Suzuki, K. (2019.8) Basic principles of the instructional design for adult education (Invited Special Keynote Lecture). *Instructional Design Seminar for Local Governance Trainers and Adult Training Experts in Nepal*, Local Development Training Academy, Nepal.
- Suzuki, K., Ito, T., & Kitazume, A. (2019.7) Output-centered training design: A JICA project at Ethiopian Water Technology Institute. *A paper presented at International Conference for Media in Education (ICOME) 2019*, China Capital Market Institute, Shenzhen, China (Proceedings of ICOME2019), 236-241.
- Roux, P. W., Suzuki, K., Matsuba, R., & Goda, Y. (2019.7) [Young Researcher Award] Experiential learning in blended environments: Exploring activities that develop Cultural Intelligence (CQ). *A paper presented at International Conference for Media in Education (ICOME) 2019*, China Capital Market Institute, Shenzhen, China (Proceedings of ICOME2019), 361-370.
- 甲斐晶子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明 (2019.8) 言語使用に関する省察促進を目的とした対話型入力ツールの設計と実装. CASTEL/J (日本語教育支援システム研究会) 2019 年度国際大会予稿集, 75-78

学会発表

- 平岡齊士・長岡千香子・喜多敏博・鈴木克明 (2019.9) 教育改善スキル修得オンライン教材での知的技能のテストの設計. 第 44 回教育システム情報学会全国大会 (静岡大学) 発表論文集, 61-62
- 鈴木克明・喜多敏博・平岡齊士・長岡千香子 (2019.9) 教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)の構想と無料版・有料版の公開. 第 44 回教育システム情報学会全国大会 (静岡大学) 発表論文集, 425-426
- 稲子翔太・中野裕司・杉谷賢一・久保田真一郎 (2020.3) 自己学習を振り返るための共起グラフによる学習履歴の可視化. 情報処理学会 コンピュータと教育研究会
- 鈴木克明 (2019.12) Design Principles of Higher Education Proposed toward Super-Smart Society (Invited Keynote). International Joint Conference on Information, Media and Engineering (IJCIME2019)
- 市川尚・竹岡篤永・高橋暁子・根本淳子・鈴木克明 (2019.11) チェックリストを活用した教材企画書の相互評価力を診断するシステムの開発. 日本教育メディア学会第 26 回年次大会 (徳島文理大学) 発表集録, 147-148
- 竹岡篤永・高橋暁子・市川尚・根本淳子・鈴木克明 (2019.11) 大学版上級 ID 専門家養成講座: 授業改善支援のための質問の開発. 日本教育メディア学会第 26 回年次大会 (徳島文理大学) 発表集録, 57-58
- 高橋暁子・竹岡篤永・市川尚・根本淳子・鈴木克明 (2019.11) 大学版上級 ID 専門家養成講座の設計のための授業コンサルテーションの試行. 日本教育メディア学会第 26 回年次大会 (徳島文理大学) 発表集録, 55-56

- 合田美子・山田政寛・新目真紀・半田純子・長沼将一・上田勇仁（2019.9）大学生の生涯学習とキャリアレジリエンスの関係．第44回教育システム情報学会全国大会（静岡大学）発表論文集，53-54
- 久保田真一郎・杉谷賢一・中野裕司・武藏泰雄・戸田真志・右田雅裕・喜多敏博・北村士郎・松葉龍一・岡智典（2019.9）大学初年次を対象とした情報倫理としての引用を学ぶ教材について．第44回教育システム情報学会全国大会（静岡大学）発表論文集，433-434
- 甲斐晶子・松葉龍一・合田美子・和田卓人・鈴木克明（2019.9）日常生活における言語使用を学習目標設定につなげるリフレクション支援ツール「REFLECTION-BOT」の形成的評価．第44回教育システム情報学会全国大会（静岡大学）発表論文集，339-340
- 喜多敏博・長岡千香子・平岡斉士（2019.9）安全教育での利用を目的とした音声ユーザインターフェイスによるLMS機能強化．日本教育工学会第35回全国大会（名古屋国際会議場）発表論文集，547-548
- 鈴木克明・市川尚・高橋暁子・竹岡篤永・根本淳子（2019.9）大学版ID専門家養成上級ワークショップの構想とその体系化．日本教育工学会第35回全国大会（名古屋国際会議場）発表論文集，85-86
- 甲斐晶子・松葉龍一・合田美子・和田卓人・鈴木克明（2020.3）動機づけの観点からみた「REFLECTION-BOT」の評価．日本教育工学会2020年春季全国大会論文集，403-404

論文

商業誌

- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第8回)レンガ積みよりペンキ塗り．看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(11), 952-957.
- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第7回)授業のブロック化はいいことづくめ．看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(10), 878-883.
- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第6回)学習は応用するまでが学習．看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(9), 776-781.
- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第5回)テストは最初から公開すべき．看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(8), 696-701.
- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第4回)グループワークは人のためならず．看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(7), 576-581.
- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第3回)知識は暗記するものではなく使うもの．看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(6), 476-482.

- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第2回) 時間が足りないのは講義をするから!?. 看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(5), 396-399.
- 平岡斉士（2019）核心に迫る授業改善 インストラクショナルデザインによる事例検討(第1回)アテンションをプリーズしない. 看護教育 = The Japanese journal of nursing education 60(4), 306-311.

講演

- Suzuki, K. (2019.7.24) Japanese Society 5.0 and AI. In A. Zhao (Chair), Invited Panel: AI in Education (China-Japan-Republic of Korea). International Conference for Media in Education (ICOME) 2019, China Capital Market Institute, Shenzhen, China.

外部獲得資金

- 久保田真一郎・松葉龍一・平岡斉士・合田美子・鈴木雄清（2019）学習ログにおけるバーストをもとにした学習行動の分類と学習支援. 2019年度－2021年度科学研究費補助金（基盤研究(C)） 科学研究費助成事業データベース
- 平岡斉士・松葉龍一・宮崎誠・久保田真一郎・長岡千香子（2019）生涯学習における自立的 e ポートフォリオ構成・活用能力修得のための学習支援環境構築. 2017年度－2019年度科学研究費補助金（基盤研究(C)） 科学研究費助成事業データベース
- 合田美子・山田政寛（2019）自己調整学習を越えて：生涯にわたって成長するための学習モデルの開発. 2017年度－2019年度科学研究費補助金（挑戦的研究(萌芽)） 科学研究費助成事業データベース
- 戸田真志（2019）不均一性を前提とした海中浮遊物の利用による環境負荷の低い三次元水流計測システム. 2019年度－2021年度科学研究費補助金（基盤研究(C)） 科学研究費助成事業データベース
- 喜多敏博・松居辰則・北村光司・富田賢吾・苑田裕樹（2019）教育で防ぎ得た重大事故を防ぐ能動的 L M S を軸とする安全教育システムの実現. 2019年度－2021年度科学研究費補助金（基盤研究(B)） 科学研究費助成事業データベース
- 中野裕司・宇佐川毅・梶田将司・鈴木克明（2019）標準化を踏まえた学習活動データの集積と解析のための Web API の開発. 2015年度－2019年度科学研究費補助金（基盤研究(B)） 科学研究費助成事業データベース
- 都竹茂樹（2019）運動技能修得のデザイン原則を用いた、筋力トレーニング指導者育成 e ラーニングの開発. 2018年度－2020年度科学研究費補助金（基盤研究(C)） 科学研究費助成事業データベース
- 鈴木克明・平岡斉士（2019）特定領域に強い教育設計専門家を養成する学習環境構築に関する総合的研究. 2016年度－2020年度科学研究費補助金（基盤研究(B)） 科学研究費助成事業データベース

セミナーの開催



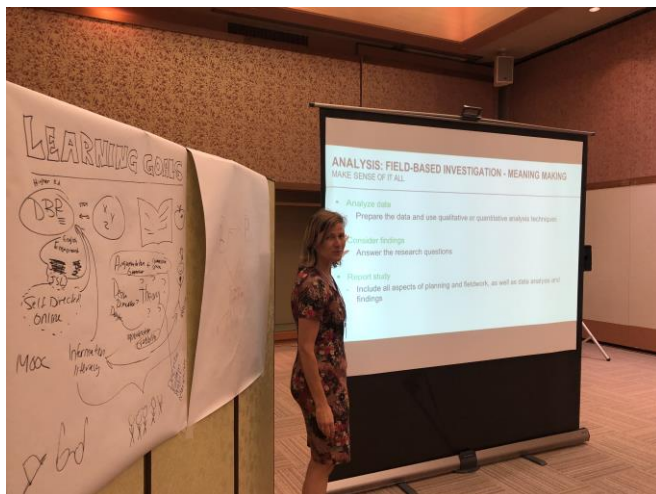
デザイン研究ワークショップ

熊本大学教授システム学研究センターは、2019年9月9日から10日の二日間、オランダ、トウエンテ大学の Susan McKenney 先生をお招きし、デザイン研究ワークショップ、「実践を研究としてとらえるためのアプローチを学ぶ」を静岡県浜松市にて開催しました。

McKenney 先生は、教育の改善を目的とした実践から理論を導き出す研究手法である、デザイン研究の方法をまとめた”Conducting Educational Design Research”の著者で、カリキュラム開発の研究者でもあります。デザイン研究（Educational Design Research または Design Based Research）は、研究者と教育に携わる当事者が、実践の現場に足を据えて、教授



開催地 ホテルウェルシーズン浜名湖



法や学習環境の設計改善と効果検証の反復を繰り返す研究手法です。ワークショップには、高等教育や社会人教育に従事する研究者や博士後期課程の学生など、熊本大学内外から10名が参加しました。まず、デザイン研究を進める方法と理論について McKenney 先生より概説がありました。McKenney 先生が指導した博士後期課程の学生が、実際にどのように研究を進め、教育的成果をあげ、論文にまとめたのか、具体的な研究実践事例からデザイン研究の実

際を学ぶことができました。さらに、参加者自身が手掛けているデザイン研究を二人一組で模造紙にマッピングし、これまでの自身の研究の振り返りや現状の問題分析を整理し、今後のデザイン研究の方向性を共有しました。模造紙を囲んでの参加者通しのディスカッションと McKenney 先生のアドバイスは、参加者の今後の教授法の改善やデザイン研究にすぐに活かせる有意義なものとなりました。参加者は、それぞれのデザイン研究の構想を温めつつ、二日間の合宿形式のワークショップを終えました。



国際学会/国内学会 参加報告



国内学会：参加報告 1

学会名：2019PC カンファレンス（コンピュータ利用教育学会 年次集会）

期間：2019 年 8 月 6 日(火) ～8 日(木)

開催地：甲南大学岡本キャンパス

CIEC（コンピュータ利用教育学会）2019 年度年次集会である「2019PC カンファレンス」に参加した。開催テーマ「挑む ぶつかる 乗り越える」は、開催校である甲南大学がスポーツ・健康科学教育研究センターを有するスポーツ名門校でもあることにインスパイアされたもので、これからの教育・学習に求められるものをスポーツやスポーツ科学から考えてみようという趣旨で定められた。

基調講演 1 は、日本を代表する短距離ランナーであった伊東浩司甲南大学スポーツ・健康科学教育センター教授が自身の選手歴 + 指導歴 36 年の間での理論やコーチング、指導者と選手の関係等の大きな変化を解説した「変動するスポーツ現場 – 自分自身の経験をもとに –」、基調講演 2 は、酒折文武中央大学理工学部准教授がスポーツ現場で可能になった選手やボールを追跡したトラッキングデータなど複雑かつ大規模なデータの収集や、それらデータが戦術判断やチーム編成、怪我予防など様々な場面で活用されていることを紹介する「スポーツデータサイエンス – スポーツにおけるデータ活用とその発展 –」であった。これらはスポーツ以外の教育やビジネスの現場でも大いにヒントになるものであった。

この他にも「スポーツと教育とデータサイエンス」をテーマとしたシンポジウム、今後の学習環境の設計や運営などを甲南大学が有する KONAN INFINITY COMMONS（愛称：iCommons）の紹介を交えて議論するセミナー等が数多く行われた。

初日の夕方にはこの学会の特色のひとつである「イブニングセッション」が行われた。これは参加者が自由に企画・運営する約 2 時間のセッションで、筆者（北村）は同学会九州支部と大学生協事業連合九州地区のジョイントプロジェクト「情報生活サポート研究会」のメンバーとして、全国約 100 大学で開講され受講生も 17,000 名に至っている大学生協 PC 講座の課題や改善の方向を約 50 名の参加者で議論する交流セッション「大学生協 PC 講座の課題を考える」を主催した。

また筆者は、分科会（口頭発表）でも同講座の改善に向けた授業設計や電子教材の提案を「大学生協 PC 講座短期集中型プログラムと DECS 電子教材の試作」として発表し、多くのコメントを得ることができた。

オーディエンスとしても発表者としても多くの刺激を得られた PC カンファレンス、2020 年は 8 月 18 日(火)～20 日(木)に同志社大学京田辺キャンパスで行われる。次年度も参加し、多くのアイデアや刺激を得たいと考えている。（文責：北村）

国内学会：参加報告 2

学会名：教育システム情報学会全国大会参加報告

期間：2019 年 9 月 11 日（水）～13 日（金）

開催地：静岡大学 浜松キャンパス

教育システム情報学会の全国大会が、2019 年 9 月 11 日から 13 日に、静岡大学浜松キャンパスで行われた。プレカンファレンスや企画セッションなど、教授システム学研究センターの関係者による発表は 12 件あった。

プレカンファレンスでは、教授システム学研究センターで検討されているラーニングテクノロジスト養成のためのオンラインコースの一部が紹介された。教授システム学研究センターの喜多、戸田、長岡と私で担当し、プレカンファレンスでは、実際のコースとプレゼンテーションを使い行われた。喜多からは、AI（人工知能）をテーマに、チャットボットの教育利用、VUI(Voice User Interface)の教育利用に関するタスクの紹介があった。私は機械学習をテーマに、SVM(Support Vector Machine)による分類問題を扱うタスクについて紹介した。また、戸田が担当した LA(Learning Analytics)をテーマにしたタスクでは、Moodle のログを考察することや簡単な分析を検討する内容について紹介した。長岡は AR(Augmented Reality)の教育利用に関するタスクで、WebAR の体験や教育利用を考えるタスクの紹介があった。フロアから、それぞれにコメントをいただき、単なる学習支援ではなく教材設計を行った上で、これらのツールや手法を教育に活用していく必要があることを再認識する機会となった。

基調講演は、教育システム情報学会会長の柏原昭博先生から「学習支援システム研究の核心と拡がり」というタイトルで、AIED(Artificial Intelligence in Education)の背景や歴史をもとに教育システム情報学の在り方について話題提供があった。研究発表は、様々な角度から情報システムにより学習支援を行った成果が共有され、議論されていた。

教授システム学の研究拠点としてこれまで以上に本学会へ寄与できるよう、理論と実践を繰り返し、学習者の活動に必要な情報の収集・処理・伝達・利用のための教授システムの構築について研究を推進して行こうとあらためて感じた大会となった。（文責：久保田）

国内学会：参加報告 3

学会名：日本教育工学会秋季全国大会参加報告

期間：2019 年 9 月 7 日（土）～ 8 日（日）

開催地：名古屋国際会議場

日本教育工学会(JSET)秋季全国大会が、2019 年 9 月 7 日から 8 日に、名古屋国際会議場で行われました。本年度より、秋季大会と春季大会の 2 回の全国大会が開催されることになり、今回はその初回の秋季大会で、一般研究発表がポスター発表のみとなり、期間も土日の 2 日間とコンパクトになりました。

シンポジウムでは、1 件めは、Twente 大学の Susan McKenney 先生をキーノートとした「デザイン研究をどう実際に行い、教育改善に生かすのか？」というテーマで、2 件目は、公立はこだて未来大学の松原仁先生をキーノートとした「AI 時代に求められる教育工学の役割」というテーマで活発な議論が交わされました。チュートリアルセッションでは、当センター長であり学会長でもある鈴木克明による日本教育工学会の紹介に始まり、学術分野、SIG、論文誌の査読方針等に関するチュートリアルがなされました。企画セッションにおいては、学会の将来構想公開討論会をはじめ、6 つのユニークなテーマに関して活発に議論されました。

ポスターセッションは、全部で 5 セッション、324 件の発表があり、そのうち教授システム学研究センター関係者によるポスター発表は 20 件、約 6%でありました。センター教員自身による発表は、鈴木克明による「大学版 ID 専門家養成上級ワークショップの構想とその体系化」、喜多敏博による「安全教育での利用を目的とした音声ユーザインターフェイスによる LMS 機能強化」で、それ以外は、連携研究員との共同研究であったり、教授システム学専攻学生の進行中の修士研究であったり、修了後のまとめであったり、様々でした。

これらの共同研究の発表を支えたものとして、合宿と研究発表の練習が挙げられます。今回は、共同研究員で教授システム学専攻 4 期生の大石奨のお世話で、会場近くの「ホテルいろは」で合宿があり、連日、研究打合せと発表練習が行われました。

今回の参加で、当センターが教授システム学の研究拠点として、本学会へ一定の貢献を行っていることが確認できましたが、これまで以上に学会へ寄与できるよう、自戒の意味も込めて、教員自身による積極的な発表をさらに進める必要性を感じました。（文責：中野）

国際学会：参加報告 1

学会名：FLEAT(Foreign Language Education and Technology) VII 2019

期間：2019 年 8 月 6 日～9 日

開催地：早稲田大学（日本）

2019 年 8 月 6 日～9 日まで、早稲田大学で開催された FLEAT (Foreign Language Education and Technology) VII 2019 に参加し、キーノートとして発表しました。本国際学会は、日本の文部科学省と大学英語学会の後援を受けて、International Association for Language Learning Technology (IALLT)と Japan Association for Language Education and Technology (LET)が共同開催しました。今回のテーマは、“Language Learning with Technology Facing the Future,” associating foreign language learning with science and technology で、外国語教育とテクノロジーの関係を広い視点から検討することが目的でした。

8 月 6 日はプレカンファレンスとして、招待されたエキスパートによる様々なワークショップが提供されました。8 月 7 日からメインカンファレンスとして、研究発表、ポスター、シンポジウム、キーノートスピーチなどが実施されました。学会の報告によると、国内外から約 400 名が参加したそうです。キーノートは、私の他に Prof. YAMANA, Hayato と Dr. JEONG, Hyeonjeong でした。本報告では、キーノートの 3 講演について整理します。

8 月 7 日には、Prof. YAMANA による Learning Analytics for the Future と題した講演がありました。MOOCs におけるドロップアウト予測、問題解決過程の自動分析、母語予測などをふくむ最新のラーニングアナリティクス技術が紹介されました。母語予測では、英語または中国語の上級外国語学習者であっても、母語を 77%で予測できることが報告されました。問題解決過程の自動分析に関しては、デジタルペンによる筆記を分析する方法が解説されました。MOOCs では、通常、ドロップアウト率は約 90%と高いことが課題となっています。それを、学習開始の早い時期に、ドロップアウトしそうな学習者を予測することで手立てを打つ方法を考えるための研究が紹介されました。ラーニングアナリティクスにおいて、収集できるデータの種類が多様化し、分析方法も新しい方法が開発されていることを再認識できる講演でした。本講演により、外国語教育特有のデータについても、その活用方法について考えさせられました。

次に、脳科学が専門の Dr. JEONG の講演が 8 月 8 日にありました。講演のタイトルは、Brain Mechanisms in Second Language Learning: A Social Cognitive Neuroscience Perspective でした。fMRI を用いて、第 2 言語習得時の脳の状態を測定した実証実験の結果を分かりやすく解説されました。発表された研究プロジェクトは大きく二つありました。一つ目は、新出の単語を

覚えるときに、社会的文脈でノンバーバル情報とともに学ぶ場合と、母語の訳語を通して学ぶ場合との比較でした。結果は社会的文脈でノンバーバルの情報とともに学んだ方が、脳のネットワークが確認でき、より効果的に学ぶことが示唆されたと報告がありました。二つ目は、オンライン同期で対面と、オフライン非同期で録画されたビデオというコミュニケーションのモードの違いが、第2言語でのコミュニケーション中の脳のメカニズムへどのように影響するかを調査したものでした。オンライン同期対面の方が、脳がよりバランス良く、広範囲で活性化されたとの報告があり、オンラインでの交流でも外国語習得が促される可能性が紹介されました。



キーノート講演の様子

最後に、8月9日、How to Integrate Theory, Practice, and Technology for Balanced Data-Driven and Knowledge-Driven TELLと題して発表しました。研究と実践の連携についての発表を依頼されていたので、これまでのTELL(Technology Enhanced Language Learning)の研究と実践を、個別の自己学習支援と協調学習支援に整理して紹介しました。その中で、テクノロジーを活用することで、収集できるデータの多様性とその活用の必要性、データだけでは学習に関する重要点を見過ごしてしまう、または間違って解釈してしまう可能性について指摘しました。反対に、理論に関して、従来の観察や経験によって整理・開発された理論とは異なる、または、新しい事項が、データによって示されることがあり、理論の再訪が必要になるケースも出てきていることを、事例を踏まえて説明しました。研究と実践を融合させていくために、Data-DrivenとKnowledge-Drivenのバランスが大切であることを主張しました。100名ほどの大学教員、学生に参加していただき、講演後も、多くの研究者の方と意見交換することができました。(文責：合田)

国際学会：参加報告 2

学会名：MoodleMoot Global 2019 と Open EdTech Global Festival 2019

期間：2019 年 11 月 18 日～20 日

開催地：Esade Forum（バルセロナ、スペイン）

これまで世界の各国・各地域ごとに独自に行われている MoodleMoot（Moodle ユーザが集う情報交換イベント）のはじめての世界版、MoodleMoot Global <https://moodle.com/events/global/> が 2019 年 11 月にバルセロナで行われた（図 1）。



図 1 世界中からの参加者



図 2 代理でのポスター発表

私は、Moodle Enhancement with VUI etc. for Realizing Safety Education in Child Safety, Chemical Experiments and Emergency Nursing Fields と題した、音声 UI と Moodle の連携に関する口頭発表(<https://youtu.be/D-YYN2O98UQ?t=2504>)と、SharedPanel による learning log export に関するポスター発表（代理）を行った（図 2）。参加者の多様性に圧倒され、また、VUI 研究の具体的なヒントも得られた有意義な国際会議であった。

MoodleMoot Global とは別に、同じバルセロナ市内で、引き続き 11 月 21 日と 22 日に Open EdTech Global Festival 2019 が、Martin Dougiamas 氏（Moodle の創始者）の呼びかけにより開催された。この集まりは、Moodle に限定した話題を取り上げる場ではなく、近年、e ラーニングや

ICT 利用教育と同じ系統のキーワードとしてよく聞かれるようになった EdTech（エドテック）に関連する話題を、多業種・多国籍の参加者（図 3）を得て、業種やソフトウェアを限定せずに取り上げ議論する集まりであった。



図 3 バルセロナ市内のイベントスペースで開催

FinTech や AgriTech など、各分野において最新技術を適用しての（特にビジネス展開を意図した）隆盛を表す言葉の類として、教育分野における言葉として EdTech もあるが、今回の Open EdTech の集まりは、学習エコシステムの全員をサポートするにはどうしたらいいか、つまり、フォーマル・インフォーマルな学習や教育を行う人、学習環境を提供する責任者、教育の価値を高めようとファンディングを行う組織、そして、Open EdTech ソリューションの開発者、の全員をサポートするにはどうしたらいいかを議論するものであった。

具体的には、以下のようなプロセスで、指針を決めた： EdTech の発展に重要だとおもう事項を、1 人何枚でも付箋紙に書いて壁に貼る（図 4）。似ている項目を集めグループ化し、できたグループごとに机を決め、それぞれが参加を希望する机に集まる。（この際できたグループは、オープンな教育学と協調学習、生涯学習と認定、学習分析・研究・AI、資金と政策、組織変革の促進と管理、技術基準と相互運用性、の 6 つであった。）グループ内でさらに具体的に事項を出し合い決めていく。それと並行して、だれでも書き込めるオンラインドキュメント上に、全体としての指針(guiding principles)の案を匿名で自由に書き込む。沢山書き込まれた案に対して、重複や類似のものを整理した上で、全体セッションで（リアルに）挙手をして（図 5）、賛同数が多かったものを残す。さらに、適宜意見を出し合いつつ、全員で見届けながら指針文の推敲を全体セッションで行い、指針を完成させていく。（議論や作業の合間には、しばしばコーヒープレイクがあり、バルセロナ内外の顕著な教育実践例の報告もあった。）



図 4 参加者全員がアイデアを提出して整理



図 5 多数決や議論を通して指針を決定

このようにして参加者全員で合意されたのが、以下の 12 項目からなる指針である。著者による非公式な拙訳で日本語に翻訳したものが以下の通りである。

- 教育は基本的人権であり、Open EdTech は、地球上のすべての人が質の高い教育に公平にアクセスする優れた手段となりうるものです。
- オープンな標準規格や相互運用性を強く支持します。
- 教育の技術は、集団的に共有して管理・利用されるべきです。
- 私たちは、世界をより良くするために、教育者や学習者に力を与えたいと考えています。
- 技術を前進させる主体が教育。その逆ではありません。
- Open EdTech を取り巻く人々が戦略的に提携・連携することを奨励します。
- Open EdTech の技術は、最大限、優れた設計の元に作られ、競争力があり、持続可能であるべきです。
- オープンソースを用いた実践を重要視します。
- 標準規格やツールも含め、すでに利用可能なものを用いることが基本と考えます。
- EdTech がオープンであるためには、その持続可能性を支える仕組みも透明性を持つ必要があります。
- 目標やロードマップを決定する際には、様々なコミュニティと緊密に連携します。
- Open EdTech のツールやリソースを作成したり推奨したりする場合、私たちは多様性を理解し尊重します。

Open EdTech のサイトは、<https://openedtech.global/> である。現在もオンラインでのディスカッションが続けられており、いずれまたオフラインでのミートアップの開催も予定されている。

2020 年 3 月 31 日

コンテンツ制作者：
教授システム学研究センター教職員

監修者：
喜多敏博（教授システム学研究センター教授）

編集担当者：
長岡千香子（教授システム学研究センター特定事業研究員）
石田百合子（教授システム学研究センター特定事業研究員）
西本陽子（教授システム学研究センター技術補佐員）

熊本大学教授システム学研究センター
〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40番1号
電話：096-342-2895
ウェブサイト：<http://www.rcis.kumamoto-u.ac.jp/>